

THE
JAPAN FOUNDATION
2009/2010

國際交流基金 2009年度 年報

国際交流基金 ジャパンファウンデーションとは

世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する組織として、1972年10月に特殊法人として設立され、2003年10月に外務省所管の独立行政法人となりました。現在、本部と京都支部、2つの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、および海外21カ国に開設された23の海外拠点をベースに、外部団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流を3本の柱として活動しています。政府出資金(1,130億円)を財政的基盤とし、この出資金の運用益、政府からの運営費交付金および民間からの寄附金などにより運営しています。役職員数は230名(2010年3月31日現在)です。

沿革

1972年 国際交流基金 (The Japan Foundation) 設立

1989年 日本語国際センター (埼玉県) 設置

1991年 日米センター (Center for Global Partnership) 設置

1997年 関西国際センター (大阪府) 設置

2003年 独立行政法人国際交流基金となる

2006年 日中交流センター設置

国際交流基金の設立の目的は2002年(平成14年)に定められた以下の法律に則ったものです。

独立行政法人国際交流基金法 第3条

「独立行政法人国際交流基金は、国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行うことにより、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする」

国際交流基金の活動3本の柱

文化芸術交流

芸術や暮らしのなかで生まれた日本の価値観と世界の価値観が触れ合う機会をつくりだす

言語の違いを超えた感動は、日本への興味と共感を生み、理解を促す源泉となります。国際交流基金は、そのような源泉を生み出す場の提供をめざし、美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、各分野のネットワークづくりを支援しています。

海外における日本語教育

日本語を理解する人を増やすこと

それは世界に日本の理解者を増やしていくこと

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや理解を世界に広げていくことにつながります。国際交流基金は日本語教育が世界で活発に行われるよう、全世界規模での日本語能力試験(JLPT)の実施や教材開発、海外日本語講座の展開、日本語教育の専門家の海外への派遣、海外で教える教師の訪日研修など、さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

日本研究・知的交流

日本への深い理解と世界の「知」への関心

ふたつが交錯するところに

世界共通の課題を解く鍵がある

海外での日本研究を支援すること、海外の社会や文化への理解を日本のなかで広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

2009年度 国際交流基金主要事業カレンダー

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
<ul style="list-style-type: none"> ● 「アヴァンギャルド・チャイナ——〈中国当代美術〉二十年」展 [日本] ● 「WA：現代日本のデザインと調和の精神」展 [ハンガリー、ドイツ、ポーランド] → P.39 <ul style="list-style-type: none"> ● 巡回展「out of ordinary / extraordinary 現代日本写真」 [英国] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第22回テヘラン国際図書展 [イラン] ● 「1969 !日本ヌーベルバーグと松本俊夫」特集上映会 [ドイツ] ● 喜多流大島能楽堂 北欧能公演 [フィンランド、スウェーデン] ● 第15回ソウル国際ブックフェア「日本年」 [韓国] → P.34 <ul style="list-style-type: none"> ● カマン・カレホック遺跡文化財展示・保存支援 [トルコ] → P.15 <ul style="list-style-type: none"> ● 上妻宏光韓国公演 — AGATSUMA & PURI [韓国] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第53回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館 やなぎみわ「Windswept Women：老少女劇団」 [イタリア] ● ババ・タラフマラ「ガリババの不思議な世界」インドネシア公演 [インドネシア] <ul style="list-style-type: none"> ● 「つるとかめ」中央アジア公演 [キルギス、タジキスタン、カザフスタン] ● 文楽ロシア公演 [ロシア] → P.13 	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本映画祭 Eiga-sai 2009 [フィリピン] → P.14 ● 日本紹介イベント「Japanitaly」 [イタリア] → P.38 <ul style="list-style-type: none"> ● アジア・大洋州音楽公演「A Night of Japanese Harmony」 [オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 心連心：中国高校生長期招へい事業 第3期生帰国前報告会 [日本] → P.16 ● 柔道人材育成技術指導 [レバノン] 	<ul style="list-style-type: none"> ● レクチャー・ワークショップ「風呂敷・デザインと環境保護」 [ブラジル] ● レクチャー・デモンストレーション「剣玉と江戸太神楽」 [英国、デンマーク] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本ポップ映画特集上映会 [ドイツ] ● 巡回展「ウィンター・ガーデン：日本現代美術におけるマイクロロボットの想像力の展開」展 [ドイツ] ● 心連心：中国高校生長期招へい事業第4期生来日 [日本] → P.16 <ul style="list-style-type: none"> ● 「true/本当のこと」欧州公演 [英国、オランダ、ドイツ、フランス] ● 第11回日本映画レトロスペクティブ・市川崑特集 [ロシア] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 書道デモンストレーション [アルゼンチン、ウルグアイ、チリ] → P.15 ● 第5回アジア次世代美術館キュレーター会議 [シンガポール、マレーシア] ● バルカン室内管弦楽団日本特別公演 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 和菓子レクチャー・デモンストレーション [イタリア、ドイツ、ギリシャ] → P.15 ● 「JAPAN GOOD DESIGN」展 [シンガポール] ● 中央アジア・コーカサス巡回音楽公演 A Thrilling Music Night with Four Japanese Musicians [トルクメニスタン、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア] → P.13 ● J-pop in China 2009 [中国] → P.34 <ul style="list-style-type: none"> ● インド沖縄民謡公演「沖縄の島々の歌」 [インド] → P.36 <ul style="list-style-type: none"> ● 日メコン交流年記念 TWIST and SHOUT: Contemporary Art from Japan [タイ] → P.12 	<ul style="list-style-type: none"> ● 巡回展「バラレレ・ニッポン 現代日本建築展 1996-2006」 [スウェーデン] ● 巻太郎・和太鼓公演 [トルコ、アルジェリア] ● 日本の映画製作会社の歴史シリーズ 第3弾：東映特集 [フランス] ● 巡回展「写楽再見」展 [米国] ● シリア・ヨルダン デジタル・アニメを通じた人材育成フォローアップ招へい事業 [日本] ● 和力(わりか) 東欧公演 [スロベニア、セルビア、モンテネグロ] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 巡回展「現代日本デザイン 100選」 [クアラルンプール] → P.35 ● 東京芸術見本市 (TPAM) [日本] ● 第28回リヤド国際ブックフェア [サウジアラビア] → P.14 ● 日本酒レクチャー [カナダ] → P.15 <ul style="list-style-type: none"> ● 文化人招へい ジョン・ホールデン(英) 講演 「国境を越える文化の価値」 [日本] ● 第3回国際交流基金ボラナビ著作・翻訳賞 [韓国] ● 第19回開高健記念アジア作家講演会 ウェット・ヘーマムーン [タイ] → P.15 ● 巡回展「未来への回路 — 日本の新世代アーティスト」 [インド] ● 巡回展「武道の精神」 [トルコ] ● 細江英公写真展：劇場の記憶 [ドイツ] ● 第8回バンコク国際図書展 2010「日本年」 [タイ] <ul style="list-style-type: none"> ● 文化人招へい ベトナム若手グループ [日本] → P.15 ● 文化人招へい アフガニスタンの国民的歌手 ウスタード・グルザマン [日本] 		
<ul style="list-style-type: none"> ● 「日本語でケアナビ」インドネシア語版公開 [日本] ● タイ人日本語教師短期訪日研修 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● インドネシア中等教育日本語教師研修 [日本] ● 第37回日本語教育研修会 [タイ] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外日本語教師短期研修(暑期) [日本] ● マレーシア中等教育日本語教師研修 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 海外日本語教師上級研修 [日本] ● 第50回外国人による日本語弁論大会 [日本] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 海外日本語教師短期研修(夏期) [日本] ● 第4回全国大学日本語教師研修会 [中国] ● 大韓民国中等教育日本語教師研修 [日本] ● 『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』刊行 <ul style="list-style-type: none"> ● 海外日本語教師長期研修 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 専門日本語研修(外交官・公務員) [日本] ● 中国大学日本語教師研修 [日本] 	<ul style="list-style-type: none"> ● ケルン日本文化会館 設立40周年記念事業 「日本語を学ぶ—日本語学習の魅力と学習体験報告」 [ドイツ] ● 海外日本語教師長期研修 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 専門日本語研修(外交官・公務員) [日本] ● 中国大学日本語教師研修 [日本] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 日本語国際センター設立20周年シンポジウム [海外53の国・地域(台湾を含む)・日本] → P.21 <ul style="list-style-type: none"> ● 日本語国際センター設立20周年シンポジウム 「JF日本語教育スタンダード—その活用と可能性—」 [日本] ● 日本語国際センター設立20周年 記念式典および講演会 [日本] → P.22 <ul style="list-style-type: none"> ● 「認知言語学の拓く日本語・日本語教育の研究と展望」 国際シンポジウム [中国] ● 公開講座「アニメ・マンガと日本語教育」 [日本] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中東日本語教育セミナー [エジプト] ● 平成21年度日本語学校教育研究大会 [中国] ● 北京日本学研究中心事業(北京外国語大学/北京大学実施分) 第6次3カ年計画開始 [中国] <ul style="list-style-type: none"> ● 「環境保護と司法～日本の経験に学ぶ」セミナー(第2回) [タイ] ● アルザス欧州知的交流事業／日本研究セミナー「明治」 [フランス] → P.30 ● アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 日本研究ベトナム巡回セミナー [ベトナム] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中国研究者・知識人グループ招へい (国際関係/北京グループ) [日本] ● シンポジウム「文化と社会：文化事業の社会的インパクトを考察する」 [日本] ● NPOフェローシップ・公開シンポジウム [日本] ● 日米アジアメディア会議 (CART) [中国] ● フリードリヒ・エーベルト財団共催 シンポジウム「未来の子ども、子どもの未来」 [日本] ● 日本理解講座(講師：エレナ・ゴロソワ) [ロシア] ● 日メコン交流年記念セミナー [ベトナム] 	<ul style="list-style-type: none"> ● フィリピン中等教育機関 における日本語教育導入支援のための教材開発プロジェクト [フィリピン] ● 2009年度第2回日本語能力試験 [海外53の国・地域(台湾を含む)・日本] → P.21 <ul style="list-style-type: none"> ● 日本語教育研修会「日本語教授法シリーズ第4回「読むことを教える」」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 大学生・大学院生のための日本語教授法セミナー [日本] ● 日本語エラーニングサイト「アニメ・マンガの日本語」公開 → P.23 ● 日本語教育状況調査 ブラジル日本語教育環境マップ作成 [ブラジル] <ul style="list-style-type: none"> ● 日本語学習者訪日研修(李秀賢氏記念韓国青年招へい事業) [日本、韓国] ● インドネシア日本語教育学会 全国セミナー「対照言語学を通じた日本語教育」 [インドネシア] ● 日本語教育専門家会議 [米国] ● 日本語教育研修会「日本語教授法シリーズ第5回「話すことを教える」」 [日本] ● 日本・アルゼンチン交流シンポジウム「グローバルイゼーションと文化的アイデンティティ」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 中国研究者・知識人グループ招へい (国際関係/北京グループ) [日本] ● シンポジウム「文化と社会：文化事業の社会的インパクトを考察する」 [日本] ● NPOフェローシップ・公開シンポジウム [日本] ● 全国JET日本語教授法研修 [日本] ● 国際交流基金 日本語教授法シリーズ第4巻「文法を教える」刊行 [日本] ● 「中国大学日本語教師研修 修了生フォローアップ研修会開催」 [中国] ● WEB版「エリンが挑戦! にほんごできます。」公開 → P.23 ● 「JF日本語教育スタンダード2010」発表 → P.24 				
<ul style="list-style-type: none"> ● 王緝思(北京大学国際関係学院院长)講演会 「私が見た日本、そして日中関係への展望・提言」 [日本] ● 講演会およびターブルンド「EDO—江戸時代の生活と文化」 [フランス] ● JENESYS 次世代リーダープログラム「グローバル金融危機における人の移動とコミュニティの役割」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 国際シンポジウム「平和のための文化イニシアティブの役割 ～日独からの提言～」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 「APECを巡る日米協調セミナー：～APEC as an Asia-Pacific Community: Looking Ahead to Japan and the U.S. Chairmanships～」 [日本] ● 京都支部 講演会 第1回「ドイツの日本研究者が語る日本の暦文化」 [日本] 	<ul style="list-style-type: none"> ● フルブライトー CULCON 共催シンポジウム「日・米ソフトパワー：地球的課題への取り組み」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 講演会「日本の防衛政策、変化への誘惑」 [フランス] ● 四川大地震フォローアップ事業 [中国] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 米国際関係論・ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム [日本] → P.31 ● カナダ日本研究ネットワーク・シンポジウム [カナダ] <ul style="list-style-type: none"> ● 第6回日露フォーラム [ロシア] ● 講座「国際交流の理論と実践」 [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● カナダアジア研究学会フォーラム 「先住民族、開発、そして気候変動」 [カナダ] ● 日中韓次世代リーダーフォーラム2009 [中国、韓国、日本] ● 世界日本研究者フォーラム [日本] → P.28 <ul style="list-style-type: none"> ● 日中韓文化交流フォーラム [中国] 	<ul style="list-style-type: none"> ● 国際交流基金賞授賞式 [日本] → P.8 	<ul style="list-style-type: none"> ● 日韓知的交流事業 「社会的企業が拓く日韓の新たな出会い」 [韓国] ● JENESYS 次世代リーダープログラム「アジア・オセアニア地域の青年が担う包括的平和構築：文化、教育の可能性」 [日本] ● 日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム「リーダーシップとは何か：キャリア、コミュニティ、そして文化への価値観を語る」 [日本] ● 国際シンポジウム「近代化とイスラーム」 [インドネシア] <ul style="list-style-type: none"> ● モンゴル日本学会 日本研究シンポジウム2010 [モンゴル] ● 安倍フェローシップ・プログラム「ボリシーフォーラム」 [日本] ● シンポジウム：中日文化比較の現在 [中国] <ul style="list-style-type: none"> ● 世界災害語り継ぎフォーラム [日本] <ul style="list-style-type: none"> ● 日本研究セミナー「新海章司教授講演」 [タイ] 							

理事長からのごあいさつ

2009年は国内外の政治、経済、社会のさまざまな局面で変化、変動が見られる年となりました。日本では政権交代が起これ、行政刷新会議などにおいて、政府の事業、予算の見直しが行われ、政府や政府関係機関の事業の必要性、有効性、効率性が厳しく検証されると同時に、「公共性」とは何かという点や「公的」機関の活動のあり方もあらためて問い直されております。こうしたなか、国際文化交流活動を担う公的機関であり、独立行政法人である、私ども国際交流基金（ジャパンファウンデーション）におきましても、事業仕分け等の一連の議論を踏まえ、基金（ファンド）の一部を国庫へ返納すること、文化芸術交流事業をさらに海外へ重点化すること等を実施することになりました。

その一方で、海外での日本の文化への関心は依然として高く、しかも、その関心は多様化しています。もはや言い古された感のあるマンガやアニメの人気はもちろんですが、音楽、ファッション、現代小説、食文化も含め、日本の現代文化に触れる機会を求める海外からの声は、たいへん強いものがあります。そして、これらのポップカルチャーへの関心から日本語の勉強を始めたいという人々も、若い世代を中心に広がっています。他方、洗練された日本の伝統芸能や美術を間近に見たいという人々も多くの国・地域に存在しています。さらに、日本人や日本社会の伝統と現代を共存させてきた感性や考え方、平和で安全な社会を実現してきた精神と努力等はそれ自体、国際社会に貢献しうる要素であり、世界に広めうる日本文化の側面と考えられ、このような幅広い概念に基づいた文化交流も重要になっています。

国際交流基金では、こうした海外からの関心に応えつつ、日本文化の紹介と国際相互理解の増進を効果的、効率的に実施していくため、2003年10月に独立行政法人化して以来、事業の改革、組織・機構の改革、運営の改革を行ってまいりました。事業の面では、事業の選択と集中を強く意識し、プログラムの整理・見直し、要請の高い事業分野である海外日本語教育の充実、「文化を通じた平和構築」等のテーマを設定した事業の実施等により、活動の集中化とともに積極的な海外展開を行ってまいりました。また、組織・機構面では、文化芸術交流事業、海外における日本語教育事業、日本研究・知的交流事業の主要な3事業分野に対応する組織改編、国・地域毎の事業の戦略性を強化するための海外事業戦略部の設置、マドリッド日本文化センター等の新設による海外拠点の拡充を進めてまいりました。さらに、運営面では、管理費や人件費の削減・合理化に取り組むとともに、事業収入の拡大による自己収入の増加に努め、また、非営利組織、民間企業等のさまざまな

国際交流の担い手と連携し、開かれた運営に努めてまいりました。今後もこうした取り組みを継続し、自らの活動を効率化しつつも、より多くの成果を出せるように努めていくとともに、私どもの活動をより多くの方々に「目に見える」ようにしていきたいと考えております。

2009年度においては、こうした方針のもと、文化芸術交流では、日本の現代の若者文化や生活文化が海外において関心の高いことから、引き続き、マンガ、アニメ、日本食等を紹介する事業を数多く実施しました。同時に現代の文化の背景、基礎となっている日本の伝統文化を紹介する展覧会、公演等も「日メコン交流年」、「日本・ドナウ交流年」等の機会に実施しました。また、「文化を通じた平和構築」に関連した事業として、コンボ紛争地域の諸民族により構成されるバルカン室内管弦楽団の訪日公演を実施しました。

海外における日本語教育事業では、アニメやマンガをきっかけとする日本語学習者、あるいは、ネット時代の学習者を支援するために、ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」、すでにテレビでお馴染みの「エリンが挑戦！にほんごできます。」のウェブサイト版を公開しました。また、日本語教育に携わる教育者への支援として、「JF日本語教育スタンダード2010」の第1版を発表しました。一方、海外における日本語能力試験に関しては、2009年度より年2回の実施とし、その結果、54の国・地域で77万人が受験しました。

日本研究については、世界各地から第一線で活躍する研究者を日本に招へいし、「世界日本研究者フォーラム」を開催し、変動する国際情勢の中での日本研究の現状と課題を共有する機会となりました。また、知的交流においては、環境、多文化共生などの世界共通の課題について、国を越えて議論する場を設けています。さらに、平和のために文化や文化交流をいかに活かしようかといった課題を巡り、内外の文化交流機関との協働事業も推進しています。

言うまでもなく、グローバリゼーションが進展する今日の国際社会において、日本は他の国・地域との関係のなかで、自らの国、社会の安定と繁栄を維持し、世界の平和と幸福の増進に貢献していかなければならないでしょう。日本と他の国・地域との相互理解を深め、文化の分野において世界に貢献することで、日本の国民、社会が国際社会のなかで積極的な役割を演じ、また国際社会の信頼を得るために、文化交流は重要な意義をもっております。国際交流基金が、この重要な分野において引き続き貢献できますよう、皆様のいっそうのご理解とご支援をお願い申し上げます。

2010年11月



国際交流基金
理事長 小倉和夫

- 00 2009年度 国際交流基金主要事業カレンダー
- 02 理事長からのごあいさつ
- 04 業務改革の取り組み
- 05 国際交流基金の活動 2009年度のハイライト
- 06 国際交流基金の海外拠点／2009年度 主な国・地域別の取り組み
- 08 国際交流基金賞／地球市民賞

09 **文化芸術交流**

- 10 文化芸術交流事業の紹介
- 12 2009年度 主な事業

17 **海外における日本語教育**

- 18 海外における日本語教育事業の紹介
- 20 2009年度 主な事業

25 **日本研究・知的交流**

- 26 日本研究・知的交流事業の紹介
- 28 2009年度 主な事業

32 **情報提供・国内連携**

- 34 **海外拠点の活動**
- 40 国際交流基金からの情報発信
- 42 文化芸術交流事業概観
- 44 海外における日本語教育事業概観
- 46 日本研究・知的交流事業概観
- 48 民間からの資金協力
- 50 財務諸表
- 53 諮問委員会等
- 54 海外拠点一覧／国内連絡先一覧／組織

業務改革の取り組み

国際交流基金は、2003年10月の独立行政法人化以来、時代の要請に合った事業を効率的に実施するため、活動内容や運営方法について改革を進めています。

2009年度は2007年度から開始された第2期中期計画期間(2011年度までの5年間)の3年目、中間にあたる年度であり、中期計画における組織運営面、事業面、両面の目標を達成するため、費用の削減・効率化、自己収入の確保、組織改革および時宜に適ったニーズの高い事業の実施に引き続き取り組みました。

中期計画とは……独立行政法人は、主務大臣が示す中期目標(3年以上5年以下)に基づき中期計画を策定し、主務大臣の認可を受けた後、その計画に沿って業務を行います。国際交流基金の独立行政法人化後の第1期中期計画期間は2003年10月から2007年3月までの3.5年間で、期間内に当初の目標を達成しました。第2期中期計画は2007年4月から2012年3月の5カ年間の計画を設定しています。

1. 一般管理費を2007年度から5年間で15%削減

2008年4月に本部を新宿区四谷に移転するなど、一般管理に係る経費を大幅に削減したことにより、3年目で16.4%の削減を達成しました。

2. 運営費交付金を充当して行う業務経費につき、毎事業年度1.2%以上の削減

外部団体との連携促進や価格競争の推進、業務の重点化、ウェブ媒体の活用などによる経費節減に努め、事業の質を落とさず経費を削減する努力を行った結果、4.5%の削減を達成しました。

3. 機動的かつ効率的な業務運営

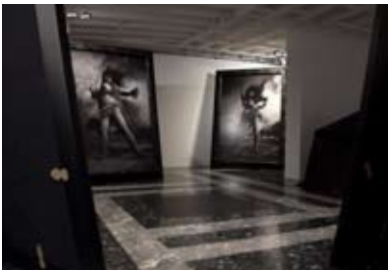
より柔軟かつ機動的に事業を実施するため、業務運営体制を改革し、2009年4月から本部および附属機関において部を統合し、事業部門においてチーム制を導入しました。

4. 外部リソースの活用と収入拡大

国内高等教育機関との連携により、国際交流共同研究センター運営への参画、日本語試験センターにおける共同研究など、国内・海外の各種団体との共催、協力などを積極的に進め、外部リソースの活用を図りました。また、寄附金の受け入れ、受託事業の実施などにより、収入の拡大も図りました。

5. 多様な海外機関とのネットワークづくり・連携強化

国際交流基金の海外拠点に加え、「JFにほんごネットワーク(さくらネットワーク)」の中核メンバー、中国の「ふれあいの場」、海外の文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルやゲーテ・インスティトゥートなど、多様な機関との連携・協力を図りながら、海外での事業を実施しました。



© Miwa Yanagi 2009

第53回ヴェネチア・ビエンナーレ

美術のオリンピックともいわれ、歴史あるヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展で日本館の展示を主催。作家やなぎみわの迫力あるインスタレーションが展開される日本館に、会期中約23万7千人が来場した。

50万人

「Performing Arts Network Japan」

日本の舞台芸術情報を海外に発信する上記ウェブサイトへの年間訪問者数が50万人を突破し、平均1,300人/日がアクセス。2009年度に掲載されたインタビューは茂山千之丞、藤本隆行、蜷川幸雄、飴屋法水、三浦基、岡田利規など。

27万人

世界各地で日本映画の上映をサポート

成瀬巳喜男監督『乱れ雲』などの古典から荻上直子監督『めがね』などの近作まで、世界52カ国で主催した映画祭の来場者は合計約13万人。助成した映画祭の来場者数を合わせると、世界中で27万人以上が日本映画の世界に触れた。

5万人

「みんなの教材サイト」登録者5万人

日本語教師向けに教材用素材と教材制作のノウハウを提供する「みんなの教材サイト」。2002年の公開から7年目を迎え、登録者数が5万人を突破。2006年の調査では海外で日本語を教えている教師は約4万5千人。世界の日本語教師にとって欠かせない情報源となっている。

1回→2回

2009年度から年2回の受験が可能に

日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し、認定する日本語能力試験。1984年の初回以来、毎年12月、年1回の実施であったこの試験が、国内外からの強い要請に応え、2009年度より7月と12月の年2回実施に。受験者数は過去最高の77万人に上った。



ロシアで初の本格的な文楽公演を実施

日本の三大古典芸能のひとつ、文楽が「チェーホフ国際演劇祭2009」で上演され、ロシアで初の本格的な文楽公演が実現した。演目は「曾根崎心中」（全8回上演）。映画や翻訳された戯曲を通して文楽はロシアではよく知られており、実際の上演が待ち望まれていた。



日本語国際センター設立20周年

日本語教育の専門施設である日本語国際センターは、2009年で設立20周年を迎えた。全米日本語教師会連合のシュミット事務局長が記念講演を行い、記念式典には、かつて日本語国際センターで研修を受け、今では駐日大使となったOBも駆けつけた。

4,500人

2009年度は218名の研究者が来日

海外で日本の研究を行う専門家が対象となる日本研究フェローシップ。国際交流基金は設立以来、日本での研究や調査、交流活動を支援しており、2009年には合計30カ国218名の専門家が、研究や博士論文執筆のために来日。来日したフェローは通算4,500人を超えた。

**文化×
平和構築**

文化交流がテーマの国際シンポジウム

文化交流の意義を再検討するシンポジウムをゲーテ・インスティトゥート、毎日新聞社との共催で実施。紛争地や被災地における文化活動を取り上げ、国際文化交流事業が平和に対して果たす役割を再評価。平和のための文化の役割を広く社会に問いかけた。

国際交流基金の海外拠点

国際交流基金は21カ国に23の拠点を設けています。これらの拠点を足がかりに、世界各国の在外公館、文化交流機関や日本語教育機関等と緊密に連携をとりながら、アジア、大洋州、米州、欧州、中東、アフリカ全域で、グローバルに活動を展開しています。

欧州・中東

- ① イタリア ローマ日本文化会館
- ② ドイツ ケルン日本文化会館
- ③ フランス パリ日本文化会館
- ④ 英国 ロンドン日本文化センター
- ⑤ スペイン マドリード日本文化センター
- ⑥ ハンガリー ブダペスト日本文化センター
- ⑦ ロシア 全ロシア国立外国文献図書館
「国際交流基金」文化事業部
(モスクワ日本文化センター)
- ⑧ エジプト カイロ日本文化センター

日本

本部(東京)

日本語国際センター(埼玉)

関西国際センター(大阪)

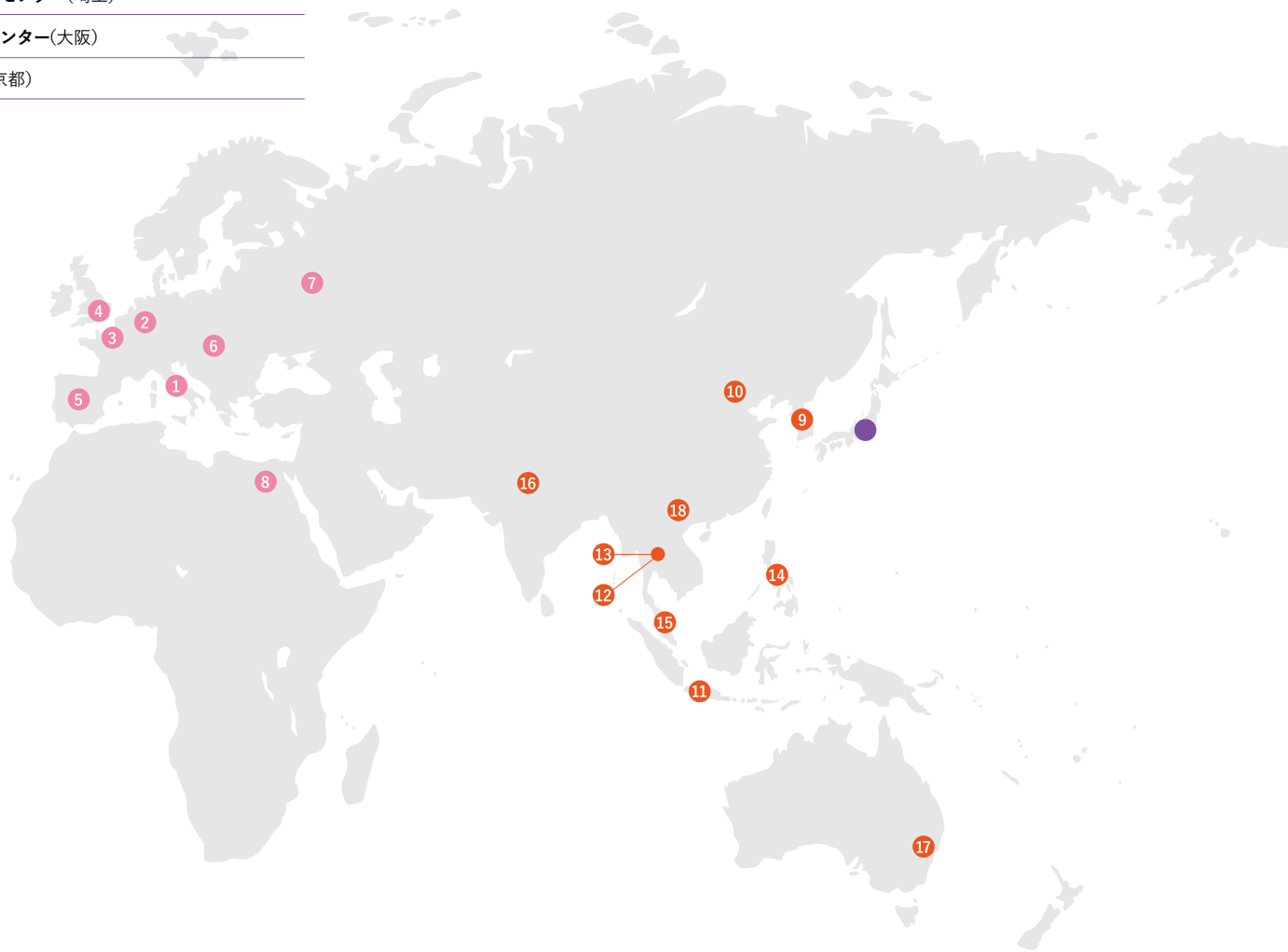
京都支部(京都)

アジア・大洋州

- ⑨ 韓国 ソウル日本文化センター
- ⑩ 中国 北京日本文化センター
- ⑪ インドネシア ジャカルタ日本文化センター
- ⑫ タイ 東南アジア総局
- ⑬ バンコク日本文化センター
- ⑭ フィリピン マニラ日本文化センター
- ⑮ マレーシア クアラルンプール
日本文化センター
- ⑯ インド ニューデリー日本文化センター
- ⑰ オーストラリア シドニー日本文化センター
- ⑱ ベトナム ベトナム日本文化交流センター

米州

- ⑲ カナダ トロント日本文化センター
- ⑳ 米国 ニューヨーク日本文化センター
ニューヨーク日米センター
- ㉑ ロサンゼルス日本文化センター
- ㉒ メキシコ メキシコ日本文化センター
- ㉓ ブラジル サンパウロ日本文化センター



2009年度 主な国・地域別の取り組み

国際交流基金は外交政策や外交関係を踏まえながら、各国・地域の状況に即した国際文化交流を実施しています。2009年度は、交流を強化すべき国として、日本にとって重要な隣国である中国、韓国、米国を位置づけたほか、「日メコン交流年」や「日本・ドナウ交流年」といった周年事業など、外交上の必要性を考慮した事業を展開しました。

中国

中国の国民に日本の姿を正しく理解してもらい、また国際社会の主要課題への対応という観点からも、未来志向的な日中関係の構築が重要です。国際交流基金では未来を担う若い世代の日本理解を促進するため、日中交流センター事業 (P.16参照) を中心に中国の高校生の長期招へいや、地方都市での日本文化紹介事業などを実施しました。また、北京日本学研究中心を中心とした日本研究の推進や、中国の研究者や知識人の招へい、日中韓にわたる交流などの知的交流事業も実施しました。

韓国

日韓交流事業を中長期的に強化することをめざして立案した「日韓文化交流5カ年計画」(2006～2010年)に沿って、日韓共通の社会的課題について両国のNPOがともに学び合える交流事業や、地方における日本文化紹介事業、若者に向けた事業などを展開しました。ソウル日本文化センター (P.34参照) を若者の町・新村エリアに移転し、より広い層の人々に働きかけていきます。

アジア

日メコン交流年として、日本とメコン川流域各国(ベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ)で官民を挙げて数多くの文化交流事業が行われましたが、国際交流基金は現代美術展「TWIST and SHOUT: Contemporary Art from Japan」(タイ P.12参照)をはじめ幅広く日本文化を紹介し、この地域と日本との交流を深めました。また、2007年に開始した「21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYSプログラム)」^{*}を2009年にも実施、日本語教師や日本語学習者の派遣・招へい (P.20参照)、若手知識人や実務家、若手の芸術家・デザイナーの招へい事業など、将来、各分野でリーダーとしての活躍が期待される人材の育成をめざした交流事業を行いました。

^{*}大規模な青少年交流事業を通じてアジアの強固な連帯の基礎を強化することを目的として、日本政府の拠出金によりASEANを中心とするアジア・大洋州の諸国から青少年を日本に招く事業。国際交流基金は2007年の開始時からこの事業の一翼を担っています。

米国

日米センター事業(知的交流・市民交流事業)をはじめ、日本語教育、日本研究、文化芸術交流の分野でさまざまな事業を展開しました。特に米国における若手知日層の育成を目的とした米国ジャーナリズム専攻大学院生招へい事業 (P.31参照) を実施したほか、日本語教育に対する理解と普及を促進する取り組み(米国日本語教育関係者グループ招へいなど)、米国の文化芸術機関等と協力し、主要都市で質の高い芸術紹介を行う事業などを実施しました。

欧州

スペインではマドリード市との協定・協力によりマドリード日本文化センター (P.39参照) を開設し、活動を開始しました。これを機に全国規模の日本語教師会が設立されるなど、日本文化への関心が高まっています。また、ドナウ川流域4カ国(オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア)を対象とする「日本・ドナウ交流年2009」に協力し、浮世絵版画、和菓子、茶道などの生活文化の紹介事業、「WA-現代日本のデザインと調和の精神」展、新内節浄瑠璃と八王子車人形公演、東欧巡回映画祭、企業文化セミナー等を主催して、日本文化に触れることの少ない地域での日本理解の促進に寄与しました。



国際交流基金賞

国際交流基金では、1973年以来毎年、学術、芸術、その他の文化活動を通じて、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に特に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人、団体に「国際交流基金賞」を授賞し、国際文化交流の発展を奨励しています。

2008年度より国際交流基金賞と国際交流奨励賞を統合し、「文化芸術交流部門」「日本語部門」「日本研究・知的交流部門」の3部門で国際交流基金賞を授賞しています。

2009年度 受賞者



文化芸術交流部門

ボリス・アクーニン

Boris Akunin

[本名：グリゴリー・チハルチシヴィリ]

ロシア

作家

ロシアのベストセラー作家。日本文学研究者・翻訳者として、日本文学をロシアに紹介するとともに、推理小説シリーズをはじめとする多彩な執筆活動において日本文化の紹介に貢献し、また、ロシアを代表する文化人のひとりとして日露文化交流に貢献している。

受賞記念講演会「観察者の目——ロシアは日本をどう見ているのか」：2009年10月9日、東京大学本郷キャンパス法文2号館にて。東京大学スラブ語スラブ文学／現代文芸論研究室との共催



日本語部門

全米 日本語教師会連合

Alliance of Associations of Teachers of Japanese[AATJ]

米国

代表：スーザン・シュミット
[事務局長]

米国の日本語教育団体。全米規模の日本語教育団体の連合体として、各団体の活動の調整を行なうとともに、研修事業や情報交流事業を実施することによって、初・中等教育段階から高等教育段階におよぶ米国における日本語教育の発展に大きく貢献している。

受賞記念講演会「アメリカにおける日本語教育とAATJの活動」：2009年10月9日、国際交流基金 日本語国際センターにて



日本研究・知的交流部門

アーサー・ ストックウィン

James Arthur Stockwin

英国

オックスフォード大学
日産日本問題研究所前所長

英国を代表する日本研究者。現代日本政治の研究において優れた業績を挙げ、英国における日本研究を促進するとともに、オックスフォード大学日産日本問題研究所前所長として対日理解の促進と日英の学術交流に大きく貢献した。

受賞記念講演会「英国という鏡に映る日本の政治」：2009年10月7日、国際文化会館にて。財団法人国際文化会館との共催

地球市民賞

2009年度 受賞者

地球市民賞は、地域・コミュニティに根ざし、かつ先導的なモデルとなる国際文化交流活動を顕彰することを目的として、1985年に「国際交流基金地域交流振興賞」として創設され、2005年に「国際交流基金地球市民賞」と名称を改めました。これまで理事長特別表彰1団体を含め76件の個人ならびに団体に授賞しています。

じねんじょ 自然生クラブ



ベルギー公演(2009年) Photo: muriel thies

1990年から茨城県筑波山麓を拠点に知的ハンディのある人を含む「組織体」をつくって環境保全型農業を営み、表現する活動を展開。海外から障がいのあるアーティストを招くなどの国際文化交流を行っている。

浜松NPOネットワークセンター



ミュージル(大壁画)制作風景(2003年)

人口の約4%弱、3万人が外国人という、全国有数の外国人集住都市である静岡県浜松市で、1998年より多文化共生事業に取り組む。教育、医療、アートを3つの柱に、人々をつなぐ「ネットワーク」をめざしている。

グリーンバレー



アーティストのカリンさんの作品より(KAIR2008)

アートを柱に過疎化地域が生き残るためのグローバルな地域活性化を図っている。海外アーティストを招く神山アーティスト・イン・レジデンス(KAIR)事業、アートの森整備事業など、2004年から徳島県神山町で活動を展開。

文化藝術交流

Arts and Cultural Exchange

文化芸術交流

Arts and Cultural Exchange

美術、音楽、演劇、文学、映画などの芸術から、食、ファッション等の生活文化にいたるまで、日本の文化芸術を紹介し、文化芸術分野のグローバルな交流をプロデュースし、ネットワークづくりを支援しています。

日本の芸術文化を世界に広める

海外の人々が日本の芸術文化と触れ合うことで、日本人が育んできた美意識や価値観を理解し、感じる機会を創出する事業を展開しています。これらの事業は造形美術、舞台芸術、映像・文芸、生活文化と広範な領域におよび、古典作品や伝統芸能、ポップカルチャーやサブカルチャー、現代演劇や現代美術等の展示、公演、出版、映画上映などに関わっています。日本の文化を多方面に発信することで、文化による国際交流の輪を広げています。

情報提供・ネットワーク

芸術や文化を通じた国際交流を効果的に進めるためには、互いの国の芸術文化に関する情報や、担い手同士のネットワークが不可欠です。国際交流基金は、舞台芸術、文学、映画などの分野において、日本の最新情報を収集し、ウェブサイトやニュースレターとして海外へ発信しています。また、芸術分野における国際展や見本市など、人や情報が集まる場を創出したり、それらの活動への支援を行っています。

日中交流センター事業

日中交流センターは、日本と中国の次代を担う若い世代の交流を促進するために2006年に設立されました。中国の高校生を約11カ月間日本に招へいし、日本の高校生と同じ学校生活・家庭生活を送る機会を提供する「中国高校生長期招へい事業」を展開する一方、中国国内では日本の雑誌、漫画、音楽CDなどを通じ、日本の最新情報を紹介する「ふれあいの場」事業を実施しています。また、日中両国の若者が、ブログや掲示板などを通じて参加・交流することのできる日中両言語のコミュニティ型ウェブサイト「心連心WEB」を運営し、日本と中国の未来を担う若者たちの交流を促進しています。

文化芸術交流事業は、
左記のコンセプトに基づき、
右の4分野をカバーする
事業ラインナップを
展開しています。

造形美術

国内外の美術館・博物館などの協力を得て、日本の美術・文化を海外に紹介する大型展覧会を開催する一方、現代美術、写真、工芸、建築、デザイン、日本人形などさまざまなテーマで企画されたコンパクトな巡回展を世界中で実施しています。また、国単位での参加が求められる「ヴェネチア・ビエンナーレ」などの国際展で日本代表作家の展示を行うほか、海外で企画・実施される優れた展覧会への助成、作家や美術関係者等の人物交流事業など、美術分野における国際交流の推進と情報発信に取り組んでいます。



© Kupferstich-Kabinett, SKD Photo:Herbert Boswank

舞台芸術

歌舞伎、文楽、能楽といった伝統芸能から、ジャズ、クラシック、コンテンポラリーダンス、現代演劇など、さまざまな日本の舞台芸術を海外に紹介しています。また、海外の芸術家との国際共同制作、日本の舞台芸術に関するレクチャーやデモンストレーション、公演団体への支援・助成なども行う一方、日本の舞台芸術に関する情報を収集、世界に発信するウェブサイト「Performing Arts Network Japan」の運営や、東京芸術見本市への参画など、情報交流やネットワーク促進も行っています。



映像・文芸

日本のテレビ番組の海外放映や、海外で制作される日本に関するテレビ番組・映画への助成、日本映画祭の開催、国際映画祭における日本映画上映へのサポートなど、映像を通じた日本理解の機会をつくります。文芸分野では、海外の出版社や翻訳者に向けて日本の書籍を紹介する季刊誌『Japanese Book News』を刊行。翻訳・出版への助成や、海外での図書展への参加などを通して、日本文学が海外に広まるための土壌づくりを行っています。



生活文化

茶道、生け花、武道、食、大道芸など日本人が生活のなかで生み出した文化を、講演やデモンストレーション、ワークショップの形で海外の人々に紹介し、体験してもらう機会をつくっています。その他、文化財保存や博物館における展示、スポーツや音楽の実技指導など、日本の文化を支える優れた知識や技術をもった専門家を海外へ派遣し、その国の文化振興に貢献しています。



タイ・バンコクにて初の大規模な現代日本美術展を開催

[TWIST and SHOUT : Contemporary Art from Japan 展]

これまでタイの現代美術界では、アーティストラン・スペースやオルタナティブスペース、大学附属のギャラリーを利用した中小規模な展覧会が主流で、本格的に現代美術を紹介する美術館が望まれていました。一方、日本の現代美術はこのようなタイの美術状況を受け、単発で紹介されることはあっても網羅的に紹介されることはほとんどありませんでした。そのような状況下、2008年バンコク都は繁華街サイアムを中心に9階建ての文化複合施設「バンコク芸術文化センター」(BACC)をオープン。翌年2009年は「日メコン交流年」に当たり、この機会を捉え、国際交流基金ではBACCと共同で、日本のポップカルチャーと密接な関連をもつゼロ年代の現代美術を紹介する初の大規模な展覧会として「TWIST and SHOUT」展を実施しました。

日本のポップカルチャーであるマンガやアニメ、キャラクターが世界的に華やかに紹介され、人気を博していますが、一方で、現代的な実存不安や社会の負の側面から来る閉塞感を癒そうとする過程で生まれてきた新たな想像力、たとえば「セカイ系」と呼ばれる物語類型や、最近の「決断主義」と

呼ばれる動向も、サブカルチャーを通じて海外にも紹介され、ひそやかな人気を博しています。この一見相反する2つの側面はゼロ年代の日本の若者文化の特徴とも言え、本展はこれらの日本の若者文化の両義性を「捻れ」と「叫び」として注目し、ポップで親しみやすい表現を備えつつ、日本社会の文化状況と真摯に向き合おうとしている日本の現代美術作家17人を、絵画、彫刻、映像、写真、インスタレーションなどによって紹介しました。近年、情報のグローバル化によって進むアジア全域を覆う若者文化の共通性は、タイと日本の視覚文化の異質性を見えにくくしましたが、日本のポップカルチャーが人気を博しているタイの、バンコクという大都市で、日本の現代美術の最新の動向を提示したこの展覧会は大きな反響を呼び、現地のメディアに多数取り上げられ、会期中の入場者数は3万2千人を突破しました。これは設立間もないBACCにとっても、また本格的な現代美術展を希望していたタイの美術関係者にとっても画期的なことでした。

[バンコク芸術文化センター(タイ)、2009年11月19日～2010年1月10日]



出品作家

草間弥生
ヤノベケンジ
会田誠
小谷元彦
山本桂輔
金氏徹平
千葉正也
青木陵子
泉太郎
のびアネキ
西野達
雨宮庸介
青山悟
志賀理恵子
高嶺格
宮島達男
遠藤一郎

「TWIST and SHOUT」展会場風景

日本文化の伝統と新しい息吹を 舞台から生き生きと伝える

■チューホフ国際演劇祭2009参加 文楽ロシア公演

2009年6月から7月にかけて、モスクワで開催された「チューホフ国際演劇祭2009」から正式に招待を受け、近松門左衛門原作「曾根崎心中」を8回にわたって上演しました。日本の三大古典芸能のうち、能と歌舞伎はすでに紹介されていたロシアで、初めて文楽（人形浄瑠璃）の本格公演が行われた背景には、世代を超えた日本文化への関心の高さがあります。

ロシアでは、文楽が登場する北野武監督の映画「Dolls」（2002年）が2年を超えるロングランを記録したこともあり、本公演は映画ファンの注目も集め、会場には若者の姿が目立ちました。各メディアの報道に加え、口コミの評判も終盤の集客につながったようです。各分野の専門家からも文化交流事業として高い評価を受け、今後のロシアにおける日本研究へも大きな影響を与えうると認められました。

[プーシキン劇場（モスクワ）、2009年6月30日～7月8日]

■中央アジア・コーカサス巡回音楽公演——A Thrilling Music Night with Four Japanese Musicians

中央アジア交流年事業の一環として実現したのが、中央アジア・コーカサス4カ国での、薩摩琵琶、奄美シマ唄、ギター、ボーカル、パーカッションによる巡回音楽公演でした。邦楽器と洋楽器の組み合わせによる、日本音楽の固有性と普遍性



を内包したダイナミックな演奏は各地でインパクトを与え、各公演ともスタンディングオベーションで包まれました。また、2010年3月には、ウズベキスタンで共演したユルドゥス・トゥルディエワ氏を日本に招き、帰国公演を開催しました。[国立劇場（トルクメニスタン）、国立音楽院（ウズベキスタン）、国立ロシア演劇劇場（アゼルバイジャン）、国立ルスタヴェリ劇場（グルジア）ほか、2009年11月17日～27日]

■沢 知恵 韓国公演 —— The Line

ソウル日本文化センターの移転オープンを記念して、日本人の父、韓国人の母をもつシンガーソングライター・沢 知恵氏によるライブを、ソウル、釜山で開催しました。同氏は1998年に韓国政府より公式に認められ日本語の歌を歌うなど、早くから日本と韓国との交流を続けてきました。日韓にとって節目の年である2010年、両国にいまだに横たわるさまざまな「Line（ライン）」がなくなるよう祈りを込め、オリジナル曲をはじめ、日韓で親しまれている曲を日本語、韓国語、英語で歌いました。

[KT&G サンサンマダンライブホール（ソウル）、延世大学百周年記念館コンサートホール（ソウル）、釜山市民会館小劇場（釜山）、2010年2月2日～5日]



[上] 文楽ロシア公演ポスター
[左上] 中央アジア・コーカサス巡回音楽公演
——A Thrilling Music Night with Four Japanese Musicians
[左下] 沢 知恵 韓国公演 —— The Line
Photo : KT&G SANGSANG MADANG

日本の映像作品と図書を積極的に海外に紹介し、日本文化の姿を伝える

■フィリピンでの日本映画祭 Eiga-sai 2009

マニラ日本文化センターと在フィリピン日本大使館との共催による本映画祭は、「Eiga-sai」としてフィリピンの映画愛好者や学生、日本語を学んでいる人たちの間ですっかり定着しています。今年度は日比友好月間のオープニング事業として、『ALWAYS 三丁目の夕日』『明日の記憶』『かもめ食堂』『嫌われ松子の一生』など計8作品が上映され、フィリピン国内の6会場での総入場者数は20,309人と盛況でした。

[マンドラヨン市、ケソン市、ダバオ市、セブ市、バギオ市、2009年7月2日～8月20日]

■中欧4カ国でテレビ番組『ハチミツとクローバー』放映

ハンガリーの民放テレビ局であるANIMAXチャンネルに、フジテレビ制作の『ハチミツとクローバー』全11話を提供し、ハンガリー、チェコ、スロバキア、ルーマニアの4カ国で放送しました。ブダペスト日本文化センターで実施したウェブサイト上のアンケートでは、原作漫画を知っているハンガリー人の視聴者から、「漫画では見えなかった日本人の日常生活や食事、信仰心や迷信などを知ることができ、とても気に入りました」という声が寄せられました。アンケートは、都市部よりも地方在住の若者からの投稿が多く、日本関連の文化紹介事業が少ない地方在住者にとって、本テレビ放映は現代日本を知る良い機会となったようです。

■サウジアラビアで国際ブックフェアに参加

2009年度は、海外の16カ国・16都市の国際図書展に参加

しました。なかでも、サウジアラビアの首都で開催された第28回リヤド国際ブックフェアは、参加国23、総入場者数200万人以上という大規模なものでした。在サウジアラビア日本大使館および社団法人出版文化国際交流会(PACE)との共同で出展した日本ブースには、書籍382冊、カタログ類1,500冊が展示され、会期中3,000人が来場し、賑わいました。折り紙のデモンストレーションなども好評を博し、ブースでの展示に対する評価も高く、本の購入を希望する声が多数寄せられるほど反響が大きいものでした。

[サウジアラビア、2010年3月2日～12日]

■日本理解を促進する図書の翻訳出版・助成

国際交流基金は、優れた日本文学作品などの翻訳・出版や、日本文化紹介図書の書き下ろし作品の出版に対して助成を行い、日本文化への理解を深めてもらう活動を行っています。2009年度には、76件・51冊・27カ国の出版・翻訳事業を実施しました。角田光代『八日目の蟬』英語訳(講談社インターナショナル)や加藤周一『日本文化における時間と空間』仏語訳(CNRS Editions)などのほか、スロベニア語への出版・翻訳助成を行った川端康成『雪国』(Sanje出版社)は、日本語から直接翻訳・紹介される図書が限られているスロベニアで、日本のノーベル文学賞受賞作家の作品が初めて紹介されたとあって、メディアにも取り上げられ評判となりました。翻訳者イズトック・イルク氏による解説も付されており、「現代恋愛小説が創造力の最高峰ではない」と古典の魅力が紹介されています。



[上] 第28回リヤド国際ブックフェアでの日本ブース
[左] Eiga-sai 2009 リーフレット(フィリピン)

多様な分野の人物交流を通して 日本理解促進や相手国の文化振興に貢献する

■カナダにおける日本酒についての講演と試飲

食、酒を中心とした文筆活動家・藤田千恵子氏を派遣。モントリオールでは日本をテーマに開催された学術会議と食のデモンストレーション「アジア・フードプリンツ2010」において、日本における日本酒ブームとその後についての講演を実施。バンクーバーでは、リカーストアや料理雑誌関係者などを招き、日本酒の製造過程の説明や試飲などを通じて、日本酒に対する理解を深めてもらいました。

[カナダ、2010年3月4日～12日]

■南米での書のレクチャー・デモンストレーション

書家の紫舟氏をアルゼンチン、ウルグアイ、チリの南米3カ国に派遣し、新しい日本文化紹介事業の試みとして書の講演とデモンストレーションを実施。音楽家とのコラボレーションも行うなど、ダイナミックなパフォーマンスは各地で好評を博しました。

[アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、2009年11月1日～16日]

■欧州での和菓子の紹介

ドイツ、イタリア、ギリシャの欧州3カ国では、松江市の彩雲堂の和菓子職人3人を派遣し、和菓子の歴史や背景を解説。現地の菓子職人を対象としたワークショップでは参加者とともに和菓子づくりを行い、入場制限をかけるほどの大盛況となりました。

[イタリア、ドイツ、ギリシャ、2009年11月14日～28日]

■トルコでのカマン・カレホユック遺跡文化財展示・保存支援

カマン・カレホユック博物館（2010年7月開館）へ、展示技術の専門家、永金宏文氏（株式会社ディグ）を複数回にわたって派遣。開館の準備段階において、現地の学芸員への技術指導をはじめ、展示模型の設計や制作指導を行いました。

[トルコ、2009年5月19日～29日、2010年2月28日～4月13日]

■ベトナム若手文化人グループ招へい

ベトナム日本文化交流センターの開設（2008年3月）を機に、新たな交流事業として翻訳家、映画監督、キュレーター、文芸評論家、建築家、新聞記者などのベトナムの若手文化人たちを日本に招へいし、関係諸機関の視察や専門家との意見交換を通じて文化人ネットワークの強化と拡充を図りました。また、京都や世界遺産である白川郷などを視察し、さまざまな日本文化に触れる機会となりました。

[東京、高山、京都、広島、2010年3月28日～4月7日]

■第19回開高健記念アジア作家講演会シリーズ

日メコン交流年にあたる2009年度には、タイから若手作家のウティット・ヘーナムーン氏を招へいしました。東南アジア文学賞を受賞したヘーナムーン氏は初の海外講演として日本国内4カ所で講演を行い、各会場で短編集を配布。両国でメディアに取り上げられました。

[東京、福岡、大阪、函館、2010年3月18日～27日]



[上] ベトナム若手文化人グループ招へい・
アーツ千代田3331での対話 Photo : Kenichi Aikawa
[左上] 東京視察時のウティット・ヘーナムーン氏
Photo : Tadao Kawamura
[左下] 欧州での和菓子の紹介

未来志向の日中関係を築くために 3つの事業を実施

日中交流センターは、日本と中国のより深い青少年および市民交流の実現をめざして2006年4月に国際交流基金内に設立されました。

■中国高校生長期招へい事業

中国の高校生に、11カ月間日本の高校に通い、同世代のクラスメートやホストファミリーなど多くの日本人々と交流することで、日本の社会や文化について、より実感に基づいて理解してもらう機会を提供しています。2009年度には4年目を迎え、7月末の第3期生26名の帰国に続き、9月に第4期生35名（男子5名、女子30名）が来日しました。全国各地の高校で、部活動や学校行事、ホームステイ生活を経験することにより自立心や協調性を身につけることができ、第3期生に対するアンケート調査では9割以上の生徒から「非常によかった」との回答を得ています。また、受け入れ校やホストファミリーに対するアンケートでも、受け入れた生徒について肯定的な評価が8割以上を占めました。ホストファミリーからは「初めはコミュニケーションをとるのに困りましたが、徐々に内面まで話し合えるようになり嬉しく思いました」といった、長期招へいならではの答えが寄せられています。

■ウェブサイト「心連心WEB」運営

日中同時翻訳機能により、日本語・中国語のどちらでも意見交換をすることができる「心連心WEB」(<http://www.chinacenter.jp/>)は、上記の中国高校生長期招へい事業で日

本に滞在中の高校生や、21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)の短期訪日／訪中高校生の声をブログ形式で投稿できるコーナーを中心に、日中の情報発信を行っています。等身大の両国の若者の姿を紹介することで、未来の日中友好の礎を築くことをめざしています。本サイトの対象は両国の若い世代でありながら、より広い世代からの反響も大きく、「学生たちの目に実際の日本がどう映っているのか、その感想を見ることによって、日本の文化や特徴などを再認識することも多いです」といった声も寄せられています。本サイトの2009年度のアクセス数は1カ月あたり8万4千件（概算）で、昨年度より約1万6千件の増加となりました。

■「ふれあいの場」の設置・運営

「ふれあいの場」は、日本に関する情報が少ない中国の地方都市において、若者を中心に日中の文化交流が体験でき、日本の雑誌・書籍・CD・DVD等を通して現代日本文化に触れられる場です。2008年までに、四川省成都市、吉林省长春市、江蘇省南京市、吉林省延辺市の4カ所に設置され、2009年度には新たに青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビン市にも開設されました。「ふれあいの場」ではさまざまな日中文化交流イベントも実施しています。特に2010年3月に南京ジャパンウィークの一環として開催された「南京ふれあいの場」J-popイベントは好評で、アンケートの回答者の100%から満足との回答を得ることができました。



[上]「南京ふれあいの場」での折り紙体験イベント
[左]中国高校生長期招へい第4期生来日歓迎レセプションの様子

The background of the entire page is a repeating pattern of blue paper-cut flowers. Each flower has a central circular hole and several pointed petals radiating outwards. The pattern is dense and covers the entire surface.

海外における日本語教育

Japanese-Language Education Overseas

海外における 日本語教育

Japanese-Language
Education Overseas

海外の人たちに日本語を知ってもらうことは、日本への親しみや理解を世界に広げることにつながります。国際交流基金は日本語教育が世界で活発に行われるよう、全世界規模での日本語能力試験の実施や教材開発、海外日本語講座の運営、日本語教育の専門家の海外への派遣、海外で教える教師の訪日研修など、さまざまな側面から日本語教育を支援しています。

教師・教育機関への支援

国際交流基金は、一人の日本語教師の指導が、たくさんの生徒に影響を与えることを重視し、海外の現場で日本語を教える教師の指導力向上を図るプログラムを展開しています。教師育成だけでなく、海外の日本語教育機関への助成や日本語教育のための催しに対する助成なども行います。

学習者への支援

国際交流基金は、二つの側面から学習者を支援します。ひとつは教材の制作、将来の教師の養成等、日本語の学習環境の向上をはかる間接的支援。もうひとつは、諸外国の外交官、政府・公的機関の職員、研究者等、その活動上、日本語の習得を必要とする人を対象とした研修実施といった直接的な支援です。海外の教育機関単独では、実施や継続が難しいタイプの学習者支援を継続して行っています。

海外日本語教育の促進

国際交流基金が日本語教育事業を行うなかで、その使命の重要な部分をなすのは日本語教育の基礎基盤をつくることです。日本語教育のノウハウの共有や教育機関の調査や情報交流の場の提供など、目に見えにくくても、日本語教育を世界に広げるためになくてはならない基盤をつくるために、継続的な活動を続けています。

日本語事業では、
左記のような領域を、
主に右のような事業を
通じて展開しています。

日本語教育専門家の海外派遣／ 教育機関・プロジェクト支援

海外の教育機関に日本語教育の専門家や指導助手を派遣しています。日本語専攻学科の立ち上げや中等教育への導入に伴い、日本語教育専門家の需要は高く、年間102名が派遣され活躍しています。また、海外の非営利団体が運営する日本語講座の講師謝金の助成や、海外で開催される日本語弁論大会、日本語教育に関する学術会議やセミナー、ワークショップ、日本語教師研修会等への助成も行っています。

JFにほんごネットワーク (さくらネットワーク)

さくらネットワークは、日本語普及と教育の質の向上のため、国際交流基金と協力・連携をとりながら活動する世界各地の中核的な日本語教育機関や日本語教師会をつなぐネットワークです。国際交流基金の海外拠点に加え、自らの機関内にとどまらず国や地域全体の日本語教育に波及効果のある事業を実施する機関・団体が中核メンバーとなり、より多くの人々に日本語学習の場を提供することをめざし、各地で日本語普及事業を実施しています。

海外日本語教師への研修

附属機関の日本語国際センター(さいたま市)では、海外で教えている外国人日本語教師に対する研修を行っています。各国・地域の日本語教育者のなかで指導的役割を果たしている人や、今後指導的立場にたつ人に対する高度な研修を行う一方、教授経験の浅い教師を対象にした日本語力と日本語教授能力の向上をはかる研修等、参加する教師の属性に応じて、短期・長期のさまざまな研修プログラムを実施しています。

海外日本語学習者への研修

附属機関の関西国際センター(大阪府泉南郡田尻町)では、日本と各国間の良好な関係を築くのに重要な任務にあたる人たちのための研修プログラムを行っています。諸外国の外交官、政府・公的機関の若手職員、研究者、大学院生、図書館司書や学芸員を受け入れ集中研修を行っています。また、諸外国での日本語教育を奨励するために、特定の国の日本語学習者で大学生、高校生の中から成績優秀者を日本に招いての研修も行っています。

日本語能力試験

日本語能力試験は、日本語を母語としない人を対象に日本語能力を測定し、認定するための試験です。試験は世界各地および日本国内で1年に2回^{*}、いっせいに実施され、レベルは2009年までの旧試験は4段階(1級～4級)、2010年からの改定新試験は5段階(N1～N5)です。現在、世界最大規模の日本語の試験で、2009年には54の国と地域で約77万人が受験しました。

※2009年から年2回実施を開始。海外では7月の試験は行わず、12月の試験だけを行う場合があります。

JF日本語教育スタンダード開発／ 日本語教材開発

「JF日本語教育スタンダード」は、「相互理解のための日本語」を理念とし、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるためのツールとして、また海外における日本語教育のさまざまな基盤整備の中心的役割を担うものとして、国際交流基金が開発を進めているものです。その他にも、近年はインターネットや映像を活用した日本語教師・学習者支援のためのツールの開発・運営・普及を重点的に進めています。

海外日本語教育機関調査

世界中に広がる国際交流基金の拠点、在外公館等の協力を得て、全世界で日本語教育を行う機関の調査を3年毎に実施しています。世界で行われている日本語教育についての唯一の大規模調査となっており、調査の結果は、新聞・雑誌等のメディアで引用されるケースも大変多くなっています。



日本語教育専門家の派遣と、 日本語普及のためのプロジェクトを支援

国際交流基金は、世界各地の中核的な日本語教育機関に、日本語教育の専門家や、日本語教育指導助手を派遣しています。派遣された各専門家は、各国の日本語教育の現地化と自立化の促進を目的に、教室での日本語教授、カリキュラム・教材作成に対する助言、現地教師の育成、教師間ネットワーク構築支援など、それぞれが取り組むべきミッションのもとに活動を行っています。

派遣先の機関や、その国・地域の日本語教育の現状に鑑みて派遣先機関の検討を行っていますが、2009年度は39カ国に102人の専門家を派遣しています。

また、専門家の派遣のほかに、海外の日本語講座の講師謝金助成や、日本語弁論大会、教師を対象としたセミナーなどに対する助成を通して、海外の日本語教育を支援しています。

国際交流基金の専門家が行った教師セミナーにより、日頃は孤軍奮闘で授業を行うばかりで自分自身のブラッシュアップを行う余裕がない教師にとって、自身の教授法を見直す良い機会になったという意見や、主催した弁論大会において、国際交流基金の助成金により入賞者への賞品を用意すること

ができ、学習者にとって良いモチベーションになっている、といった声が聞かれました。

■JFにほんごネットワーク

JFにほんごネットワーク(通称:さくらネットワーク)は、各地の日本語普及と教育の質の向上のため、国際交流基金と協力・連携をとりながら活動する世界各地の中核的な日本語教育機関や日本語教師会をつなぐネットワークです。2010年度末までに中核メンバーを100機関にすることを目標に、2009年度には20機関が加わり、年度末には32カ国74機関となりました。

中核メンバーの実施する「さくら中核事業」は、国や地域全体への日本語の普及・拡大・発展につながる波及効果の高い事業を支援するものです。2009年度は、教材の作成や教師を対象としたセミナーなど、14カ国で15件のさくら中核事業を実施しました。

日本語教育機関や教師の抱える問題が多様化するなかで、国際交流基金は中核メンバーとの情報共有と協力体制を強化し、より現地のニーズに合致した、かつ必要性和効果の高い日本語普及活動を展開していきます。



[上] ウクライナ日本語弁論大会(2009年9月、キエフ国立言語大学)
[右] 90名が参加したサンパウロ日本文化センターでの日本語セミナー



受験者の拡大、年2回実施の開始 そして新しい試験へ

日本語能力試験 (Japanese-Language Proficiency Test 略称: JLPT) は日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し、認定するための試験で、国際交流基金は、海外各地で現地共催機関と協力して試験を実施しています (国内での実施は財団法人日本国際教育支援協会、台湾での実施は財団法人交流協会が担当しています)。

■日本語能力試験初の年2回実施

日本語能力試験は、2008年度まで毎年12月に年1回、全世界でいっせいに試験を実施してきましたが、国内外からの強い要請に応え、2009年度より年2回 (7月・12月) の実施となりました。

第1回試験は、2009年7月5日に中国、韓国、台湾の3つの国・地域と日本国内で1級および2級に限定して行いました。国際交流基金が実施した海外2つの国・地域の応募者数は21万5千人、受験者数は18万人に達しました。中国では新たに5つの実施地 (南寧、^{いほう}坊、揚州、昆明、海口) が加わりました。

第2回試験は、2009年12月6日に1級から4級までの全レベルが実施されました。国際交流基金は52の国と地域で試験を実施。応募者数は45万3千人、受験者は37万5千人もの規模になりました。第2回試験では、アイルランド、セルビア、コロンビアの計3カ国が新たに加わり、中国で2都市 (延吉、蘭州) と、ベトナムでダナンが新たな実施地に加わりました。初の年2回実施により、通算の受験者数は555,849人 (前年比42.3%増) となりました。

■2010年開始の新しい「日本語能力試験」に向けた準備

近年、日本語能力試験の受験者層が拡大して受験目的も多

様化し、日本語能力試験の結果 (成績) は大学入試や資格試験の要件、就職や昇進・昇格にあたっての判断基準など、さまざまに活用されるようになりました。そのため、試験開始から25年以上の間に発展してきた日本語教育学やテスト理論の研究成果と、これまでに蓄積してきた試験結果のデータなどをふまえて試験の内容を改定し、2010年から新しい「日本語能力試験」として実施することとなりました。

【試験改定のポイント】

①コミュニケーション能力重視

日本語の文字、語彙、文法などの知識だけではなく、その知識を使ったコミュニケーション能力をより重視します。

②認定レベルが5段階に

レベルがこれまでの4段階 (1～4級) から5段階 (N1～N5) 区分となり、受験者が自分に合ったレベルを選びやすくなります。

③得点等化の実施

日本語の能力がより正確に測れるように、得点の出し方が変わります (等化による尺度得点の採用)。

④「日本語能力試験「Can-do」リスト」 (仮称) の提供

各レベルの合格者が日本語を使ってどんなことができるかがイメージしやすくなります。

■日本語能力試験ロゴタイプの決定

2010年7月からの新しい「日本語能力試験」の開始にあたり、「日本語能力試験 (JLPT)」のロゴタイプを募集しました。2010年3月10日の締め切りまでに825作品が寄せられ、選考委員会にて審査を行なった結果、木下芳夫さん (愛媛県) の作品の採用が決定しました。



[上] 日本語能力試験の開始を待つ受験者 (フィリピン、マニラ)
[右] 新たに採用された日本語能力試験のロゴタイプ

日本語能力試験

JLPT Japanese-Language Proficiency Test

「日本語を学ぶ」ベストな環境を 教育者と学習者、それぞれに

■海外日本語教師支援——日本語国際センターの活動

国際交流基金の「海外における日本語教育」事業のなかでのひとつの柱が教師支援のための事業です。国際交流基金の附属機関である日本語国際センターは、海外で活躍する日本語教師を迎えての訪日研修や、海外における日本語教育の基盤整備の中心的な役割を担う「JF日本語教育スタンダード」の開発など教師支援を行う活動の拠点となる施設です。

1989年に埼玉県さいたま市に設立された日本語国際センターでは、これまでに1万人以上の方が研修に参加し、海外からの日本語教師のための研修機関として高く評価されてきました。

2009年度には、設立20周年を記念してさまざまな行事を実施しました。日本語国際センターの活動は、センターのある地域の方々の協力によって成り立っており、今回の事業では、研修事業をはじめとしたセンターの活動および20年間の実績を紹介すると同時に、よりいっそうの地域交流を推し進めました。

日本語国際センター 20周年関連事業一覧

- 第49回外国人による日本語弁論大会
[2008年6月14日：埼玉県川越市]
- 高校生のための国際理解セミナー
[2009年8月29日～30日]
- シンポジウム「JF日本語教育スタンダード—その活用と可能性—」
[2009年10月4日]
- 国際交流基金賞日本語部門受賞記念講演会および20周年記念式典
[2009年10月9日]
- 日本語でつながる—国際交流まつり2009@北浦和
[2009年11月21日]



[上] 日本語国際センターのあるさいたま市周辺地域の方々との交流で、日本についての知識を深める訪日研修中の日本語教師たち
[右] 2009年度の外交官・公務員日本語研修の研修生。この日は小学校を訪ねて日本の教育現場を視察する機会もあった

■海外日本語学習者支援——関西国際センターの活動

日本語教育支援のもうひとつの柱は「日本語学習者への支援」です。多様化する日本語教育のニーズに対応するため、1997年に大阪府田尻町に設立された関西国際センターでは、海外で日本語を学んでいる大学生・高校生等を対象とした「日本語学習者訪日研修」と、職業上、日本語能力を必要とする海外の専門家を対象とした「専門日本語研修」を実施し、日本語教育支援ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」など、Eラーニング開発事業にも取り組んでいます。

専門日本語研修のなかでも、「外交官・公務員日本語研修」では日本国外務省の協力を得て、諸外国の外務省および政府・公的機関の若手職員を8カ月間招へいし、日本語と日本事情の研修を行っています。2009年度は、25カ国から28名が参加しました。

日本語の授業は、在日大使館勤務をはじめ、各国政府機関内で日本にかかわる業務に就くことが期待されている研修参加者のニーズに対応し、職務に役立つコミュニケーション能力を身につけることをめざして、オーラル・コミュニケーションに重点をおいたカリキュラムになっています。また、専門家による講義や文化体験、官公庁・企業・文化施設訪問、研修旅行など、日本社会や文化に対する理解を深め、日本国内でのネットワークを構築するための研修活動も用意しています。

本研修に参加した697名（外交官596名、公務員101名）のうち、在日大使館勤務経験者は202名にのぼり、6名は駐日大使をつとめるなど、研修修了者は日本にかかわる分野で活躍しています（在日大使館勤務および駐日大使経験者数は2009年10月現在）。



異なるメディアでの展開で 日本語教材をより多くの人へ

■WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」

「エリンが挑戦!にほんごできます。」は、国際交流基金が2005年に開発した映像教材です。マンガやアニメ等、クールな日本文化に惹かれて日本語を学ぶ若い世代の学習者を対象とし、学習者自身が日本と自分の文化を比較したり、文化背景を考察するきっかけとなるよう工夫されています。2006年10月からNHK教育テレビやNHKワールド、海外のテレビ局でも放映され、2007年には全3巻のDVD教材の販売も開始。2010年3月にはインターネットを通じていつでもどこでも学習ができる、WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」をオープン。生の日本語や日本文化に触れる機会が少ない学習者にも役立つよう、多様なメディアで教材を提供しています。

WEB版「エリン」では、さまざまなレベルの日本語学習者を想定して、一人でも学習できる機能を充実させました。たとえば、会話スキットは「漢字かな混じり」「かな」「ローマ字」「英語」の4種類の字幕が表示可能。会話スクリプトはそれぞれの語にカーソルを合わせると文法解説や参照すべき課などがバルーン表示されます。新たに作成された1,519問もの練習問題は、音声や写真、イラストを多用し、基本的な文型練習だけでなくコミュニケーションのための練習もできるようになっています。文化理解のためのコンテンツは、師範認定をめざす「文化クイズ」や日本文化が疑似体験できる「やってみようゲーム」をそれぞれ25課分、新たに開発しました。さらに、ユーザー登録をすれば「学習の記録」で勉強したページを管理できるだけでなく、自分だけの「アバター」をつくり、「にほんごクエスト」という仮定の街でWEB版「エリン」で勉強した日本語を使って実際に日本語のコミュニケーションに挑戦したりすることができます。



■ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」

いまや日本のポップカルチャーを代表する存在であるアニメやマンガは、世界の若者の間で絶大な人気を誇り、多くの日本語学習者がアニメやマンガをきっかけに日本語を学び始めるとも言われています。国際交流基金ではこの点に着目し、日本語学習者のさらなる拡大をめざし、楽しみながら日本語や日本文化が学べるEラーニングサイト「アニメ・マンガの日本語」を2009年度に公開しました。

アニメやマンガでは、独特のキャラクターが登場し、さまざまなジャンルがあるため、日本語の教科書や辞書に載っていない表現も多く、日本語学習者にとっては理解が難しいようです。

対象となるのは、日本のアニメやマンガが好きな初級から上級までの日本語学習者。サイトでは、海外で人気のアニメ・マンガ作品で実際に使われた台詞に基づいた表現を多数取り上げ、教科書にはない生き生きとした日本語を、アニメ・マンガの世界観のなかで学ぶことができます。興味やレベルによって学習内容や学習方法をユーザーが選び、クイズやゲームを通して楽しく学ぶ工夫も多々あります。アニメ・マンガの典型的なキャラクター（男の子、女の子、野郎、侍、おじいさん、お嬢様、執事、大阪人）の特徴的な表現を学んだり、「恋愛」「学校」「忍者」「侍」など、海外で人気のあるジャンルによく現れる台詞や擬声語・擬態語、背景となる文化を学ぶことができます。

2010年2月に英語版を公開以来2カ月で、世界の128カ国から50万を超えるアクセス（ページビュー）があり、好評に応じて、さらなるコンテンツの充実を図っています。



[上] ウェブサイト「アニメ・マンガの日本語」より
[左] WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」より

日本語教育の国際的な基盤整備と現状把握のための活動を進める

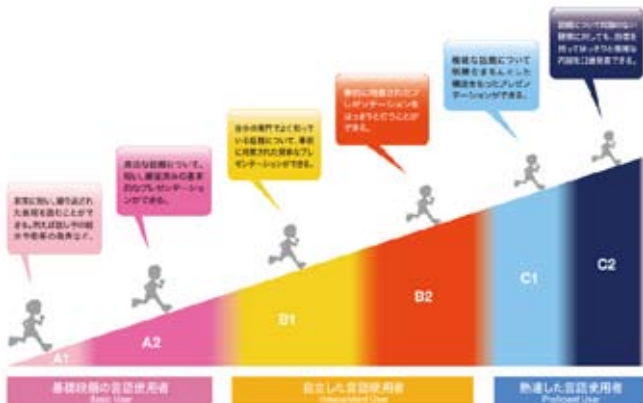
■JF日本語教育スタンダード

「相互理解のための日本語」という理念のもと、2005年より開発してきた、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるためのツールである「JF日本語教育スタンダード」(以下、JFスタンダード)を、2010年3月末に、「JF日本語教育スタンダード2010」として発表しました。国際交流基金では、日本語のさらなる国際化をめざして、日本語教育のさまざまな基盤整備に取り組んできましたが、JFスタンダードはその中心的な役割を担うものです。

言葉を通した相互理解のためには、その言語を使って何ができるかという「課題遂行能力」の向上と、さまざまな文化に触れることで視野を広げ、いかに他者の文化を理解し尊重するかという「異文化理解能力」の育成が重要です。「JFスタンダード2010」では、CEFR*の言語熟達度にもとづき、日本語の熟達度を「～できる(「Can-do」)」という形式の文で示し、「みんなの「Can-do」サイト」で提供しています。同じ物差しを使うことで、世界中のどこで日本語を勉強する、または教えていても、自分が学んでいる、または教えているレベルがどこにあるかを把握し、学習者のニーズやレベルに合った到達可能な学習目標を設定することができ、学習・教育を円滑に進めることができます。また、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」を育成し、その学習成果を評価するツールとして、ポートフォリオを提案しています。これにより学習者は日本語の熟達度を評価し、言語的・文化的体験を記録し、ふり返りながら、学習を主体的に進めることができます。

今後広く各地の現場の声を反映させることを通じて内容の充実と利便性の向上をめざしていきます。

※CEFRとは「Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment」の略称。CEFRはヨーロッパの言語教育・学習の場で共有される枠組みで、2001年に発表されて以来、ヨーロッパのみならず世界の各言語で利用されている。JFスタンダードもCEFRの考え方に基いて開発されており、日本語の熟達度をCEFRに準じて知ることができる。



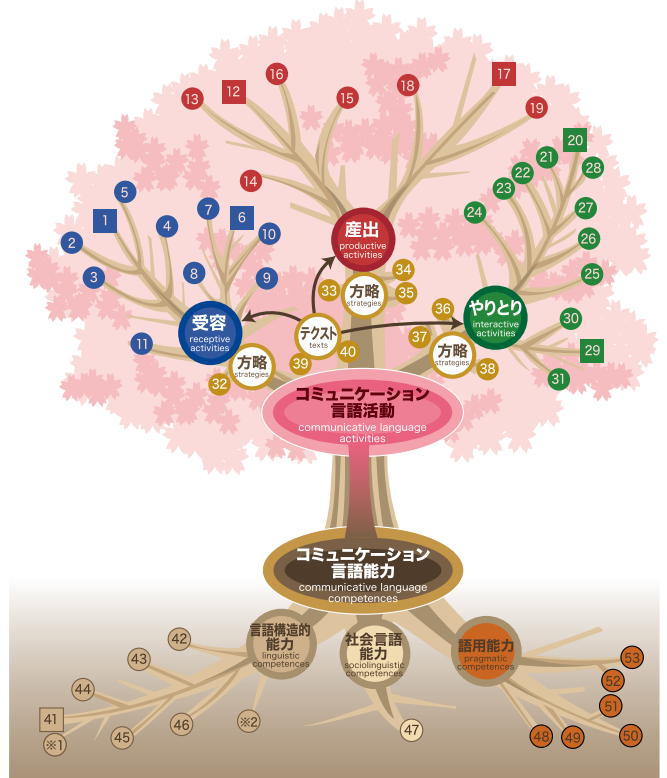
■日本語教育機関調査

国際交流基金は、海外の日本語教育を包括的に行っている機関として認知されています。私たちの最大の強みは、国際交流基金の海外拠点のみならず、世界各地に派遣されている日本語専門家、在外公館、支援先機関を通して、最新の日本語教育事情にアクセスできることにあります。このネットワークを通じて、国際交流基金は、3年毎に全世界を対象に日本語教育機関調査を行っています。

2009年度は世界各地の日本語教育機関を対象に、学習者数、教師数、学習目的、問題点等を問うアンケート調査を行いました。この2009年度の調査は、2010年度に集計と分析の結果が発表されます。

また、国・地域別最新情報も、国際交流基金HP上で毎年更新しています。2009年度からは日本語教育が実施されていない国・地域についても、特筆すべき動向などを掲載するようにしました。その結果、掲載される国・地域数は、2008年度の149から、2009年度は200に増えています。

国際交流基金HP上で公開されている日本語教育の国別情報や教育機関調査の結果は、世界の包括的な日本語教育の状況を知ることができる唯一の調査として、マスコミをはじめ、日本語教育の現状を知りたい人々に広く利用されています。



[上] 言語能力と言語活動の関係を整理した「JFスタンダードの木」
[左] 「Can-do」の6つのレベル

日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

日本研究・知的交流

Japanese Studies and
Intellectual Exchange

海外での日本研究を支援すること、そして海外の社会や文化への理解を日本の中で広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

海外での日本研究の促進

海外で行われる日本研究は、日本人や日本社会への理解を深めるだけでなく、それぞれの国と日本との良好な関係を維持させるものです。国際交流基金では、日本の社会、文化、芸術、歴史などさまざまな分野を担う海外の研究者を支援しています。多くの日本研究者は、大学や研究機関に籍を置きながら研究活動を続けていますが、そのためには研究機関による安定的なサポートや、研究活動を継続できる環境を構築することが重要です。そこで国際交流基金は、その国や地域において日本研究を担う中核的な機関に支援するとともに、研究者が日本で研究する際にフェロシップを供与するなど、世界で幅広く日本研究が行われるようプログラムを展開しています。また、研究者同士を結びつける機会を積極的に提供し、各研究者の間で交流が活性化されるよう活動しています。

知的交流の促進

世界や地域に共通する課題への理解を深め、その解決に向けてさまざまな分野の知的リーダーが国境を越えて取り組むため、ワークショップや国際会議などを開催し、国際的な対話や研究を促進しています。また、日本に対する知的な関心を喚起するために、さまざまな分野の有識者、専門家に訪日機会を提供しています。そして、同様の課題を扱う多様な担い手が企画、実施する知的交流事業を助成・支援します。こうした知的交流の推進を通じ、多層的、多角的な国際相互理解を推進することで、世界の発展と安定に向けた知的貢献をめざします。

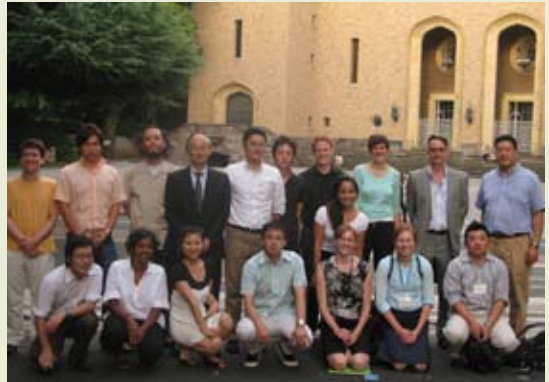
日米センター事業

日米センター (Center for Global Partnership) は、日本と米国の人々が世界中の人々とともに、グローバルな課題、アジア・太平洋地域に共通する課題に取り組み、各界各層において対話し、交流するための共同プロジェクトを実施しています。国際会議、セミナー、ワークショップ、調査などを自ら実施するとともに、国際秩序の形成に向けた対話促進活動や、グローバル化が地域社会に及ぼす影響を克服するための連携活動など、同じ課題に取り組む他団体の活動への助成を行なっています。また、フェロシップ供与やコーディネーターの派遣を通じて、研究の進展と国際的な課題解決を担う人材の育成に努めています。

日本研究・知的交流事業では、
左記のコンセプトに基づき、
右の3つの方法で研究支援や
交流の促進を行っています。

1 機関支援

日本研究の分野において、各国で中核的な役割を担う大学や日本研究センターなどの機関に対し、日本研究の基盤を強化し、人材を育成するため、中期、長期的な計画に基づいて支援をしています。研究や国際会議への支援のみならず、各機関のニーズに応じて教員拡充のための支援、客員教授の派遣、図書館の拡充のための支援などを行っています。こうした包括的・継続的な支援により、世界中の日本研究機関の活動がより活性化するように、事業を展開しています。



2 ネットワーク強化

研究者間の緊密なネットワークを強化するため、国際会議やワークショップなど、対話を促進する場を企画しています。日本研究では、特に分野を越えた専門家同士の連携を促進するため、日本研究の国際会議を支援しています。また、ネットワーク強化を目的とした自主的な活動に対し助成を行います。海外の知日層との関係強化のための学会や、日本に留学経験のある日本研究者同士のネットワークづくり、国際会議の開催経費等、活動の一部を助成することでネットワークの多様化を推進しています。



3 フェローシップ

日本研究や知的交流の分野で優れた活動をする個人に対して助成を行います。日本研究の分野では、海外の研究者、博士論文執筆者、短期滞在研究者に対しフェローシップを供与しています。知的交流の分野では、海外の有識者・専門家に対し訪日機会を提供しています。また、日米のグローバルなパートナーシップを強化する観点から、研究者・ジャーナリストの研究・交流活動を支援する安倍フェローシップを実施しています。



日本研究のグローバル化に向けての提言

国際社会における日本への関心が、中国・インドをはじめとしたアジア地域全般の関心へとシフトするなか、海外での日本研究をめぐる現状の把握と課題の整理、日本研究への国内での理解促進や、国・地域を越えた研究者間ネットワークの構築が必要となっています。国際交流基金では、日本研究のグローバル化をいかに推進できるかという課題に対し、「世界日本研究者フォーラム」の開催を通じ、世界での日本研究の現状把握と、今後の展望や課題を明らかにする取り組みを行いました。

可能な限り多くの国・地域の日本研究の現状を把握すべく、日本研究の中核を担う10カ国16名の日本研究者に参加を仰ぎ、2009年10月13日から2日間、箱根でのフォーラムを、続いて10月15日には国際交流基金本部で公開シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、「各国・地域における日本研究の現況」「地域研究と日本研究」「アジア研究と日本研究」「日本語と日本研究」の4点で現状報告と課題が議論され、以下のような視点が発表者から提示されました。

徐一平教授 [北京日本学研究中心]

「政治と経済は車の二輪と言われるが、二輪型の車は、迅速に発展できない『人力車』型か、不安定で倒れやすい『自転車』型しか考えられない。文化理解があってはじめて安定して早く走る『三輪車』型の交流ができる。『三輪車』型の交流は持続可能な交流であり、文化の理解は、政治、経済の理解を深めていく方向づけ(舵取り)のある交流だ」。

ハラルド・フース教授 [ヨーロッパ日本研究協会会長]

「ヨーロッパ日本研究協会は3年に一度、約600名の研究者を集めて総会を開いている。オリンピックのように4年に一度、日本研究者の世界総会を日本で開くことができないだろうか。また、共同研究の礎となる個人研究の支援が大事であり、特に若手研究者への支援は、人材育成のための投資である」。

パトリシア・スタインホフ教授 [ハワイ大学]

「米国における日本研究は、この10年間に内的な変化があり、かつ社会的グローバル化にともなう大きな変化があった。たとえば、戦後世代の日本研究者が引退し、研究者の世代交代が進んでいる。若い研究者は日本語能力が高く、日本語の原文資料を読み、ダイレクトな研究をしている研究者が増えた」。

参加者からは、「普段接することのない分野・地域の日本研究者と議論することができて良い刺激になった」「今回明らかになった課題を次に繋げていきたい」といった声が寄せられました。このイベントの後に参加者のひとりが企画・立案をして、今回のフォーラムで出会った参加者による会議が北京で開かれるなど、実際にネットワークの強化がなされた例も報告されています。

[世界日本研究者フォーラム2009、神奈川・箱根町、東京、2009年10月13日～15日]



国際交流基金本部での公開シンポジウム

東南アジアの若手知的リーダーとの ネットワーク形成

東南アジア諸国は地理的に日本との関係が深い国々であり、また、これらの地域は、現在目覚ましい発展を遂げています。今後、日本はこれらの地域の国々と、政治・経済面のみならず、さまざまな点で理解を深め、友好的な関係を築くことが重要と考えられています。今回のプログラムは、東南アジア地域の次世代のイスラム若手研究者を日本に招へいし、日本理解の促進と研究者間のネットワーク形成を目的としたもので、2009年11月に10日間にわたって実施されました。

プログラムに参加したのは以下の3カ国から来日した計7名の若手研究者たちです。

■インドネシア 氏名の後の()内は専攻分野(敬称略)

エウイス・ヌラエワティ(イスラム家族法)

エヴァ・ヌグラハ(コーラン史、大学マネジメント)

バンバン・スルヤディ(教育、カウンセリング心理学)

スクロン・カミル(アラブ文学、イスラムと社会政治)

イフサン・イブラヒム(宗教・国際関係)

以上5は国立イスラム大学ジャカルタ校の講師および職員

■フィリピン

ハニ・A・ブッド[ミンダナオ州立大学](国際関係論、機構マネジメント、アラビアおよびイスラム研究)

■マレーシア

ユスリ・モハマド[国際イスラーム大学](イスラム法、マレーシア憲法、マレーシアにおけるイスラム)

プログラムの主たるテーマとなった日本の近代化の出発点となる明治維新を軸に、政治、経済、技術、宗教、文化に関する講義、お茶席の体験や寺社仏閣への訪問、広島への「原爆ドーム」および「平和記念資料館」、神戸の「人と未来防災センター」「神戸モスク」などの視察を行いながら、日本に対する理解を深めました。

参加者からは、講義のテーマである「日本の近代化」が非西洋世界に属する自国の近代化を考える上で示唆に富むものであったことや、茶道体験等によって、日本人の生活文化を学ぶことができたとの感想が聞かれました。また、広島への訪問は平和の重要性について改めて考える契機となったといった声が多くありました。

このプログラムに続き、2010年3月にはフォローアップ事業として、本事業参加者と日本からの派遣講師として南山大学外国語学部の小林寧子教授が、ジャカルタに再び参集し、「近代化とイスラーム」と題するパネルディスカッションが行われました。会場は国立イスラム大学ジャカルタ校。「インドネシアでのイスラム」を専門とする小林教授の基調講演に続き、今回の招へいプログラム参加の7名のメンバーそれぞれ研究発表を行い、その後、パネルディスカッションへと続けました。日本で経験を得た上での発表や討論に、聴衆として集まった同地の大学生や大学院生、研究者から賞賛の声が多く寄せられました。

[東南アジア若手イスラム知識人招へい、東京、京都、兵庫、広島、2009年11月4日～13日]



[上] お茶席の体験で

[左] 広島平和記念公園で折りを捧げる

研究者間のネットワークが 新たな研究への道を拓く

2009年9月11日から12日にかけて、アルザス・ヨーロッパ日本学研究所 (Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace 略称: CEEJA) において、日本研究セミナー「明治」が開催されました。アルザス地方はフランスのなかでもドイツとの国境に接し、三方をブドウ畑に囲まれ、アルザスの山並みを彼方に仰ぐ風光明媚な地です。元成城学園アルザス校の学生寮を改装したCEEJAにおいて、参加者は寝食を共にしつつ、活発な議論を行いました。

本研究セミナーは、日本研究に関する広域的なテーマを設定して、そのテーマに関連するヨーロッパの若手研究者を一同に集め、日本から派遣された講師の下、相互の発表を聞き、意見と議論が交わされます。各人の研究を広げつつ深めるとともに、隣接領域を横断するようなヨーロッパにおける若手研究者のネットワークを形成することを目的としています。一昨年、昨年のテーマ「江戸」に引き続き、本年は「明治」がテーマとなりました。講師は、明治から現代にかけての日本政治史が専門で、『明治国家をつくる』などの著書のある御厨^{みくりや}貴^{たかし}教授 (東京大学)。そして、ヨーロッパ各地から9名の欧州出身の研究者と、欧州の研究機関に籍を置く日本出身の研究者が明治期に関わるそれぞれの研究成果を日本語で発表した後、意見交換を行いました。発表者と研究テーマは以下のように幅広いものでした。(敬称略)

高世信晃 [ロンドン大学 SOAS 博士課程 (英国)]

「陸奥宗光の描く明治国家像－陸奥のヨーロッパ政治制度研究と日本への導入について」

マッティン・ノーデボリ [ヨーテボリ大学助教授 (スウェーデン)]

「西洋化に対抗する－明治初期にアメリカの教科書が小学読本へ」

山梨淳 [社会科学高等研究院博士課程 (フランス)]

「20世紀初頭における転換期の日本カトリック教会－日本人カトリック者とフランス人宣教師との関係を中心に」

レスチャン・アニタ [ELTE大学博士課程 (ハンガリー)]

「明治維新における神仏分離」

太田知美 [東アジア文化研究センター研究員、ストラスブール大学講師 (フランス)]

「明治期荷風テキストにおける家族表象－虚構の日本の家族像、理想的な西洋家族像」

フレデリック・エブラール [上アルザス大学博士課程 (フランス)]

「日刊新聞草創期の連載小説をめぐって」

シルヴァーナ・デ・マイオ [ナポリ大学「オリエンターレ」専任講師 (イタリア)]

「明治初期の日本における伊太利亜王国海軍の艦隊」

阿久津マリ子 [リヨン第3大学博士課程 (フランス)]

「ヨーロッパ影響下における19世紀後半の伊万里焼生産の近代化」

オリガ・マカロバ [ロシア国立人文科学大学博士課程 (ロシア)]

「明治日本における『ナショナル美術』の概念」

講師の御厨教授は「9つの発表は、全体として幅広いテーマながら、いずれも想像していた以上に生産性豊かなものだった。母国語でない日本語で発表された方の苦労は想像に難くない。また日本人の方を含めて、日本ではなくヨーロッパで研究しているからこそ見えてくる視点で研究されていた。他方で研究者個々人は割と孤立しているとも聞いた。このセミナーを一層の研究を深める、いわばスプリングボードにしつつ、またネットワークを広げる端緒にしてもらいたい」と講評を寄せてくださいました。

国際交流基金は今後も研究者間の幅広いネットワークづくりのために活動を展開していきます。本セミナーの報告書も今後刊行する予定です。

[アルザス日欧知的交流事業・日本研究セミナー「明治」 フランス・CEEJA、2009年9月11日～12日]



CEEJA でのセミナーの様

将来の米国メディア内の 親日感の醸成を図って

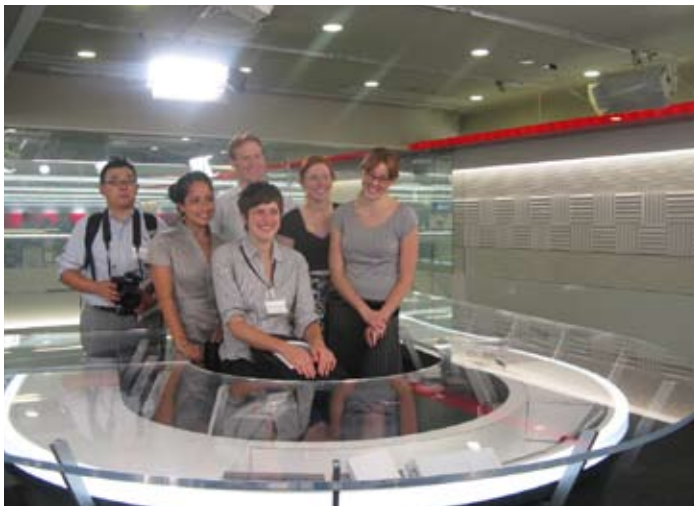
日本と米国のより密接な連携を促進するためのプログラムを展開する日米センターでは、2009年8月、「米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム」を実施しました。本プログラムは2009年度の米国のエマーソン・カレッジ（ボストン）に対する助成事業として、将来、ジャーナリストとして活躍が期待されるジャーナリズム専攻の大学院生をグループで日本に招へいするもので、6名の参加者は10日間にわたり、東京・兵庫・京都を訪問しました。東京では、日本の大学院生との交流・対話、メディア関係者・研究者・財界人などとの懇談、兵庫では、阪神淡路大震災の被災者との対話や姫路城の見学、また京都では神社仏閣などの視察を行いました。本事業を通して、参加者が実際の日本社会に触れるとともに、日本の外交や社会政策などの文化的・歴史的背景も理解することが狙いです。

滞日中、日本という異文化のなかで、さまざまな分野の人々と出会ったジャーナリスト候補生は、この経験を通して日本の精神のみならず、ジャーナリストとしてのあり方や今後についてインスピレーションを得たようでした。参加者のひと

り、サンドラ・ガルシアさんは「初めて会った私達に、亡くした家族のことなどを懸命に伝えてくれた阪神淡路大震災被災者のお話は、ジャーナリストを志した原点を思い出させてくれた」と、コメントを寄せてくれました。他の参加者からも「本プログラムをきっかけとして、今後、何らかの形で日本と関わっていきたい」「帰国後も、日本で出会った方々との繋がりを大切にしたい」「以前は、日本についてあまり知らなかったが、このプログラムで日本を身近に感じるようになった」などの感想が寄せられ、参加者の日本に対する関心を喚起することができました。

本プログラムの企画について、日本のマスコミ関係者や講師として参加した方などから、「米国メディアのバランスの取れた報道（政治、経済、社会、文化において）を向上させるうえで、将来、活躍が期待されるジュニアに対して日本理解の機会を提供することの意義は大きい」と、今後への期待の声も上がりました。

[米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム 東京、神奈川、兵庫、京都、2009年8月16日～25日]



[上] NHK国際放送局のスタジオを見学する

[右上] 出発前のオリエンテーション（米国ニューヨークにて）

[右下] 外務省を訪ねて



情報提供・国内連携

国際交流基金は主たる3つの分野での事業のほかに、国内外の国際文化交流についての情報提供や、企業と連携した事業展開、国際交流について大学と共同研究を行っています。ここではそれらの活動について、そして京都支部の活動を報告します。



JFIC ライブラリー

情報センター

情報の提供・発信に取り組む

情報センターは、国際文化交流に関する情報提供のため、プレスリリースなどを発信する広報・メディアリレーション業務を担うほか、国際文化交流専門誌『をちこち(遠近)』や年次報告書の発行、ウェブサイト、ブログ、メールマガジンなどによる情報発信(P.40参照)、国内連携事業、JFサポーターズクラブの運営、国際交流基金賞や地球市民賞などの顕彰事業(P.8参照)、ライブラリーとイベントスペースで構成される情報発信拠点「JFIC (Japan Foundation Information Center) 通称: ジェイフィック」の運営などを行っています。また、大学生などの見学・訪問の受け入れも担っています。

日本で唯一の国際文化交流専門誌『をちこち(遠近)』(隔月発行)は、2009年度は「多様性を繋ぐドナウ・ヨーロッパ」「世界と出会う歌舞伎」「メコンの暮らしから考える『人間と川』」「国境を越える人々と国家の関係」「海外で活躍している日本人が、ここにもいる」を特集テーマに取り上げ、28号から32号の5号を発行しました。2009年12月に発行された32号をもって『をちこち(遠近)』は休刊となりましたが、過去の記事をアーカイブ化し、ウェブマガジンとして再出発します。

JFサポーターズクラブは、国際交流基金の活動を紹介し、国際文化交流に親しんでいただくための会員向けのイベントを開催しました。2009年度は、モンゴル人歌手のオドバル氏と馬頭琴奏者のイラナ氏によるモンゴル民謡と馬頭琴のトーク・ライブや、韓国研究者の小倉紀蔵氏による日韓の祭りの比較についての講演会など



[左] 雑誌形式での発刊の最終号となった『をちこち(遠近)』第32号
[右] リニューアルした「AIR_J」トップページ <http://air-j.info>

を開催しました。また、会員に向けて『JFサポーターズクラブ通信』や「JFサポーターズクラブメルマガ」を発行しました。このJFサポーターズクラブの募集は2009年度をもって終了しました。

国内連携事業として、日本全国のアーティスト・イン・レジデンスの情報を発信するウェブサイトを運営してきましたが、大幅にリニューアルし、新たな検索機能をもったウェブサイト「AIR_J」として生まれ変わりました。

またJFICライブラリーでは、2010年2月から3月にかけて特別展示「ちりめん本を知っていますか?」を開催しました。「ちりめん本」は明治から昭和初期に発行された書籍で、日本の昔ばなしや文化を外国語で錦絵風の美しい挿絵とともに紹介したもの。ユニークな作りが来訪者を魅了しました。

未来を担う若者の育成、 企業との連携

「ふろしき」は日本の伝統文化であり、かつ環境にも配慮した現代性を兼ね備えています。事業開発戦略室では「ふろしき」のもつ可能性に注目し、また未来のデザインを担う若者の「ものづくり」の力を育むために、海外10カ国（韓国、中国、インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、メキシコ、ブラジル、ロシア、ベトナム）で、学生によるふろしきデザインコンテストを実施しました。優秀賞に選ばれた3点が、国際交流基金広報グッズ「JFオリジナルふろしき」（全3柄）となりました。さらに、日本の伝統的な型紙デザインをモチーフにしたKatagamiシリーズ（JFオリジナルデリバック、JFオリジナルパーソナルセット）を制作しました。いずれも商品性を兼ね備えた広報グッズとして国内外で喜ばれています。

[左] JFオリジナルふろしきの告知ポスター
[右] Katagamiシリーズの製品が掲載された告知ポスター
(JFオリジナルふろしき、KatagamiシリーズともにJFICショップで販売中)



事業開発戦略室では、もうひとつの事業の柱として、海外における日系企業の社会貢献活動との連携を通じた国際文化交流の推進を行っています。2009年度は、中国（第2回目）とベトナムにおいて日系企業の社会貢献活動に関する調査を行うとともに、昨年度調査を行ったタイの調査報告書の英語版を作成しました。

国際交流共同研究センター

セミナー・シンポジウムで 研究成果を発信

国際交流共同研究センター（Joint Research Institute for International Peace and Culture）は、国際交流基金が青山学院大学と連携・協力して運営しており、同大学間島記念館内に事務所が置かれています。

ここでは国際交流についての研究、活動の分析・評価ならびに国際交流技法の開発などの研究を実施し、その研究成果を広く社会に還元することにより、国際交流の発展に寄与することを目的とし、以下のような事柄に取り組んでいます。

- ①国際交流に関する理論および政策の研究
- ②国際交流についての教育
- ③国際交流関連データの収集および整理
- ④研究紀要の発行
- ⑤国内外の国際交流に係る研究を行う各機関との交流

2009年度には、研究プロジェクトとして「平和の為の文化イニシアティブの役割」「地域活性化と国際交流」および「国際文化機関の比較調査」を実施し、それらに関連する調査、研究会・シンポジウムや、連続ランチタイム・セミナーなどを開催しました。研究成果として『平和の為の文化イニシアティブの役割—Good Practices—』、シンポジウム報告書『文化と社会：文化事業の社会的インパクトを考察する』、研究紀要『Peace and Culture』第2巻第1号などを発行しました。

<http://www.jripec-aoyama.jp>

京都支部

多様な担い手との連携による 日本文化の発信

京都支部は、関西圏のさまざまな国際交流の担い手とのネットワークを生かしつつ、海外からの留学生・研究者など外国人を対象とした日本文化紹介活動を推進しています。

和菓子の手づくり体験や、酒造りの工程見学、錦織物の工房訪問などの体験型プログラムや、能・狂言等の舞台公演、日本映画の上映会など外国語解説付きのプログラムを通して、日本文化に触れる機会を外国の方々へ提供しています。

また、国際交流基金が招へいする日本研究者による講演会、セミナー、懇談会などを通じて、国際交流に関心をもつ市民との対話や交流を進めています。



[上]「国際交流のタペー能と狂言の会」より。茂山千五郎師による「太刀奪」
[右]金剛永謙師による「通小町」
(撮影2点とも：高橋章夫)



海外拠点の活動

国際交流基金は21カ国に23の拠点を設けており、それぞれの拠点はその国・地域の状況に合わせ、文化芸術から日本語教育、日本研究や知的交流の各分野でさまざまな交流活動を展開しています。



「TWIST & SHOUT」展（バンコク日本文化センターの項参照）より

アジア・大洋州 | ソウル日本文化センター

文化交流を通じて 日韓コラボレーション の強化と共通課題に 取り組む



春川ジャパンウィークでの上妻宏光・PURI 共演コンサート

11月にソウル市内の学生街に移転したセンターでは、「日韓文化交流5カ年計画」に基づき、日韓コラボレーションと日韓共通課題の解決を中心テーマに、多彩なプログラムを実施しました。

■第15回ソウル国際ブックフェアに出版文化国際交流会と共同出展。「日本年」の2009年は、日本の13団体が参加し約3,300点の日本書籍を展示。また、春川市で開催されたジャパンウィークでは、浮世絵展や津軽三味線奏者上妻宏光氏と韓国の国楽グループの共演コンサートを実施しました。

■中等教育日本語教師を対象とする、5日間30時間の集中研修プログラムを、夏・冬休み期間中に実施。また9月には日系企業の協賛で全国の中高校生による「第2回全国学生日本語演劇発表大会」を開催。64校が参加し、優勝・準優勝校には外務省の招へいプログラムによる日本研修旅行が提供されました。

■1月に開催した韓国のNGO希望製作所との共催によるシンポジウム・専門家会議「社会的企業の自立は可能なのか」には、日韓の専門家・実務家など200人を超える聴衆が参加しました。

アジア・大洋州 | 北京日本文化センター

若者に絶大な 人気の日本の ポップカルチャーの 「いま」を紹介



「J-pop in China 2009」での Funky Monkey Babys のライブ

中国の若者に人気の高い日本のポップカルチャーを紹介するイベントに力を入れ、注目を集めました。

■11月の「J-pop in China 2009」では、日本のアーティスト Funky Monkey Babys と加藤和樹氏によるライブと日中カラオケ大会を実施し、約1,700人の観客を集めたほか、2日間にわたって開催した「Anime Festa 2009」では日本のアニメ映画「サマーウォーズ」上映や、声優トークショー、日中合作アニメに関する講演会を実施し、約3,150人が参加して賑わいました。

■要望の多かった日本語能力試験の複数回実施を始めました。出願者数は過去最高の37万4千人を超え、38都市70会場で行われました。また、今年度も高校と大学の日本語教師を対象とした集中研修会を夏期・春期、それぞれ2都市で6日間実施し、300人以上が参加しました。

■作家リービ英雄氏の交流会と講演会を北京と南京で開催。講演会には、学生や研究者など180人が参加しました。

アジア・大洋州 | ジャカルタ日本文化センター

日本への関心を いっそう高める 伝統と現代文化の 紹介に注力



ICAF2009 選集上映セミナー

2008年の日本インドネシア友好年に続き、2009年10月には「第1回ジャカルタ日本祭り」が開催されました。センターも、日本への関心をいっそう高め、深めるための事業を、多数展開しました。

■日本の舞踊グループ、パパ・タラフマラとインドネシアのアーティストたちとの共同制作「ガリババの不思議な世界」は両国のコラボレーションとして好評を博し、2,100人の観客を得ました。また、ジャカルタ国際映画祭での「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)2009年選集上映」では日本の学生たちの最新作品の上映とセミナーを行いました。

■第2外国語として日本語を学ぶ高校生の急増を受け、国家教育省と共同で制作し、完成させた高校用教科書「さくら」が7月から全国の学校で使用されはじめました。同時に高校日本語教師の育成を図る専門的な研修や支援も充実させました。

■日本研究の拠点であるインドネシア大学などへの支援のほか、国際シンポジウム「イスラームと近代化」を実施。日本人研究者と東南アジアイスラーム知識人とのネットワーク強化を図りました。

アジア・大洋州 | バンコク日本文化センター [東南アジア総局を併設]

日メコン交流年、 美術展やダンスなど 多彩な事業を開催



「TWIST & SHOUT」展オープニング

2009年は日本とメコン地域諸国との交流年にあたり、タイ国内で多彩な文化行事を開催しました。

■日本の現代美術を紹介する日メコン交流年企画展「TWIST & SHOUT」には3万人以上の観客が訪れ、好評を博しました。日タイ共同制作によるダンス公演「コウカシタ」、衣装ワークショップ・公演「結 yui」のほか、コシノ・ジュンコ・トークショー、UNIT ASIA ジャズ公演、女性監督を特集した日本映画祭などを実施しました。

■タイ国内の日本語教育に携わる5機関の共催で、日本語教育のネットワークづくりと地方への教育支援強化のため、高校日本語教師対象の地方研修会を3カ所で開催し、85人が参加しました。

■初の地方開催となった第3回タイ国日本研究ネットワーク年次総会には160人以上の日本研究者が集まり、研究発表が行われました。また、急激な経済発展のもと課題となっている環境保護について、「環境保護と法律～日本の経験に学ぶ」と題したセミナーをタイ国最高行政裁判所と共催。日本から専門家を招へいし、裁判官や検事など433人が集うほどの関心を集めました。

アジア・大洋州 | マニラ日本文化センター

日本の現代文化の 多様性を紹介、 若者の日本理解を 深める



日本語フィエスタにおける「東京/マニラ・ストリートファッション展」

日本文化の理解を端緒に、日本語学習にも興味をもってもらうための「日本語フィエスタ」では、少年ナイフによるコンサート、日本の若者ファッションを紹介する写真展やストリートファッション・コンテストを開催(2月)。すでに人気の高いアニメやマンガにとどまらない多様な日本の現代文化を紹介しました。

■日比友好月間では日本映画祭、現代美術展のほか、日本の若手音楽家を招き「Jクラシック・コンサート」を開催。1,000人近い観客から好評を博しました。また日比ドキュメンタリー映画上映会では両国の社会問題を扱った5作品を上映しました。

■日比双方の産官学の連携で、高校生を対象に出前授業や工場訪問「会社キャラバン」を実施。メトロマニラ首都圏の高校6校の参加者246人に、日本の技術やものづくりの精神を紹介しました。

■紛争地域ミンダナオにおける平和構築を支援する取り組みの一環として、マグバサキタ財団とイスラーム民主主義フィリピン・カウンシル主催によるイスラーム社会の女性知識人の組織化を目的とした国際会議「平和の灯火、女性たちの誓い」に協力しました。

アジア・大洋州 | クアラルンプール日本文化センター

日本文化の 情報センターとして いっそうの発展を めざす



日本研究ネットワーク強化事業による巡回セミナー

センター移転1年目にあたる2009年は、日本文化の情報センターとしていっそうの周知を図るとともに、外部機関との連携や施設の活用にも力を入れました。

■日本文化を多角的に紹介する事業のなかでも、恒例の「日本映画祭」は好評で、近年の日本映画8作品の上映で2,745人の観客を集めたほか、「現代日本デザイン100選」展も盛況でした。またマレーシアの学生ダンサーも参加した公演「踊りに行くぜ!!」や、能のレクチャーやワークショップなどを実施しました。さらに、招へい事業により訪日した文化人などに日本体験談を語ってもらう場を設け、成果の還元と知識の共有を図りました。

■日本語教育を行う中等学校は5カ年で85校に倍増し、教育省による日本語教育シラバス改定の2012年導入完了に向けて、改定への協力や教師研修セミナーを行ったほか、日本語研修やコンサルティングなどを通じ、教師の育成と質の向上に努めました。

■北東アジアの経済連携をテーマに日本人専門家を迎えた巡回セミナーに約300人が参加、研究者のネットワーク強化を図りました。

日本とインドの文化を融合させた質の高い企画を実施



日印交流・インド舞踊公演

福岡県庁との共催で福岡留学フェアを開催。福岡県の大学と日本語学校が出展したほか物産展も実施され、2日間で200人の来場者を得ました。日本の公共団体やNGOにとっての日印交流の足がかりとなる提携組織として、センターの役割は大きくなっています。

■古事記の木花咲耶姫をモチーフに、インド伝統舞踊のカタックダンス公演を実施。インド人による音楽・振り付けによって日本人舞踊家が踊る、両国の文化が融合した新鮮で質の高い公演となりました。また2月の長谷川哲版画作品展「At Waste」には250人が来場し、展示会場では野々村明子氏のダンス公演も行われました。

■各種日本語教育教材の開発のほか、南アジア日本語スピーチコンテストを助成。第3期JENESYS若手日本語教師派遣プログラムでは5人の日本語教師が各地で10カ月間活動しました。

■第5回日印文学セミナーでは国文学研究資料館から研究者を招き、約80人が参加。国際セミナー「言語教育はことばと文化を結ぶ」や、国際日本文化研究センターとの共催シンポジウム「アジア新時代の南アジアにおける日本像」では幅広い分野の発表が行われました。

若者の国ベトナムで日本語教育から日本文化の紹介まで事業を全面展開



センター内図書室の一角で行われている茶道講習

ベトナムでは、日本語学習者が3カ年で40%以上増加し世界第8位となるなど若い世代を中心に日本への関心は高まっています。センター開設2年目の2009年は、日本語事業の拡大・強化に加え、ハノイ、ホーチミンを中心にベトナム各地で多数の文化交流イベントを実施、また図書室などセンター施設の充実を図りました。

■日本映画祭では「東京タワー」ほか近年の名作6作品を3都市で上映し、1万人以上の観客を動員しました。また、若手・中堅のベトナム人文化人・芸術家11人を日本に招き、原爆跡地訪問や文化人との意見交換を行うなど貴重な体験をしました。

■中等日本語教員への日本語研修・訪日研修のほか、教科書の作成を支援。日本語能力試験の受験者は3都市で1万4千人を超えました。

■ベトナム社会科学院主催の日本研究国際シンポジウムを全面的に支援、参加者はアジア・大洋州からも含め約200人。また沼野充義教授（東京大学）による日本文学の講演会を4都市で実施し、日本研究者・文学研究者が多数参加し熱心な議論が行われました。

新規事業を積極的に展開、幅広い日本文化紹介を実施



Pip&Popの作品「Under the Crystal Sky」(Facetnate!展)

広大なオーストラリアで効果的に日本紹介を行うため、ウェブの活用や企業などとの連携による新規事業の企画に力を入れています。映画を素材に日本語と日本文化を学ぶ「J-Cinemaプロジェクト」では、第1弾として製作した「Happy Family Plan」のDVD教材が好評を博し、中等教育推薦教材の指定(NSW州)も受けました。

■第13回日本映画祭を6都市で実施。シドニーとメルボルンでは21作品を上映、1万人以上の観客を動員。また新人アーティスト育成を目的とした公募展「Facetnate!」には30組を超える応募があり、3組を選定し展覧会を開催しました。

■日本語教師向けのオンライン講座は全コースが完成。イギリスからの受講も可能になり、2009年度には72人が受講。また全豪の日本語を学ぶ学生・生徒が製作した日本語のビデオ作品を募集するコンテストを開始。95校から応募があり大きな反響を得ました。

■国際交流基金賞受賞者オックスフォード大学アーサー・ストックウィン名誉教授を招き、日本の政権交代とその影響に関する講演会を2都市で開催。約180人が参加し活発な議論が行われました。

日本への親近感をベースに、多様な文化事業を展開し情報を発信



社会経済についての講演会

日加修好80周年にあわせ、カナダの諸機関と協力しつつ事業を展開。多様な日本文化の紹介を行い、教育や研究の支援を行いました。またセンター内の事業の活性化を図り、図書館は開館時間を延長し、イベント開催やポップカルチャーコーナーの新設を行った結果、来館者は2007年度の1万9千人から2万6千人へと増加しました。

■カナダの映画祭への支援に加え、10都市で日本映画上映会を実施しました。展覧会では「京都庭園写真展」「佐藤晃一ポスター展」「折り紙建築展」等を開催しました。

■全カナダ日本語弁論大会ではITを利用した中継を行ったほか、各地で日本語教育ワークショップを開催し、インターネットを活用した教師へのアドバイスも行いました。日本語教育機関調査では、2006年時の2万4千人に対して2万7千人あまりまで学習者が増加しました。

■カナダの教育機関の研究者や大学院生が参加する「カナダ日本研究学会」の年次大会を支援したほか、センターでは現代日本政治や社会経済の変化をテーマに講演会を開催しました。

米州 | **ニューヨーク日本文化センター**

**主要都市での
集中した文化発信で
日本に対する
理解を深める**



現代日本文学セミナーにて松浦理英子氏とのディスカッション

ワシントンやシカゴなどの主要都市を対象に、狂言などの伝統芸能からファッションに至る集中文化発信を行い、日本への理解の深化を図るとともに、2007年に発表された日米交流強化イニシアティブを踏まえた各機関への助成や支援、交流事業を実施しました。

■日本現代文学の紹介事業として、『親指Pの修行時代』の英語版が出版された小説家松浦理英子氏を招き、翻訳者とともにニューヨークとシアトルで朗読会やディスカッションを実施しました。

■日本研究米国諮問委員会の事務局業務を担い、9件の研究機関への支援、31人へのフェローシップのほか、米国アジア学会年次総会をはじめとする国際会議やシンポジウムなどを通して日本研究者のネットワークづくりを支援しました。また、若手・中堅研究者の対日理解と関心を深めるための「日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク・プログラム」や、大学院生招へいプログラムを開始しました。さらに、全米の日米協会(JAS)の活動基盤強化とネットワーク形成を支援し、草の根レベルでの対日理解と交流促進に努めています。

米州 | **メキシコ日本文化センター**

**日本とメキシコの
交流400周年を記念し
多くの文化行事で
より深い絆づくり**



ホセ・マルチ劇場での沖縄音楽公演

春の新型インフルエンザの流行による交流イベントの中止などを乗り越え、日本とメキシコの交流400周年を迎えて、両国の関係をいっそう強化すべく、多くの記念事業を実施しました。

■沖縄出身のミュージシャンを招いた「沖縄音楽公演」では、先島(さきしま)方言の唄も披露され、260人の聴衆で盛況でした。また濱崎道子氏による「書」の講演とデモンストレーション「大字揮毫」をメキシコ市内3カ所で開催、590人が参加しました。

■中南米諸国の教師も含む過去最高の140人が参加したメキシコ日本語教師会主催の「日本語教育シンポジウム」に併せ、「新日本語能力試験説明会」を実施。積極的な情報提供に努めました。また、地方勉強会巡回指導では、教師とアドバイザーを各地に派遣し、地方の日本語教育の水準向上と活性化に貢献しました。

■3月にはメキシコ大学院大学で日系ディアスポラをテーマに交流400周年記念国際シンポジウム「日系ディアスポラのパースペクティブ：日本、メキシコ、アメリカ」が開催され、2日間で幅広い分野にわたる考察や議論に加え、映画上映や写真展も行われました。

米州 | **ロサンゼルス日本文化センター**

**多彩な講演と
デモンストレーションで
日本文化への
より深い理解を促す**



隈取の実演 撮影：岡田伸行

「SUSHI」「TERIYAKI」「SAMURAI」などの英単語にとどまらず、より深く日本文化を知り、関心を高めてもらうために、2009年度は専門家を招いた講演を文化事業に多数取り入れました。

■10月にアメリカ西部5都市(ロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトル、ポートランド、デンバー)を巡回した「歌舞伎レクチャー・デモンストレーション」事業は、歌舞伎のエッセンスを手軽に理解できる場として好評を博しました(製作：松竹株式会社)。14人の歌舞伎役者をはじめとするスタッフを日本から招き、講演では歌舞伎の歴史や音楽、女形についてなどの解説をはじめとして、役者の化粧から着付けの様子、演奏も行われ、歌舞伎の舞台裏を知ることのできる貴重な機会となりました。また、5都市での公演はすべて満席となり、4,000人の観客を動員しました。

■約6,000人が参加した全米外国語教師協会(ACTFL)の年次総会で開催された「日本横町」(全米日本語教師会主催)に出展。外国語教育の関係者と交流や情報交換を積極的に行い、他言語の支援団体とともに、米国での外国語教育の発展を後押ししました。

米州 | **サンパウロ日本文化センター**

**日本とブラジルの
交流の歴史に
新たな1ページを**



巡回写真展「日本の子ども60年展」

日本人移民100周年を祝った2008年に続き、2009年はブラジルと日本両国の交流の歴史に新たな1ページを刻む年として、多くのイベントを実施しました。ブラジル国内の日系社会と協力した巡回写真展「日本の子ども60年展」は、両国の歴史をあらためて振り返るきっかけとなり、大きな反響を得ました。また、併設図書館では図書館蔵書目録のインターネット公開を開始、外部からの自由な蔵書検索を可能にするなど、ユーザビリティの向上を図りました。

■日本のポップ・カルチャーを紹介する催しも多く実施し、ロリータファッションショーと講演会を各地で開催。レシフェの日本市では2万人の観衆のもとファッションショーを行いました。

■ブラジルおよび近隣国での日本語教師研修、サンパウロ州中等教育の教材開発などに加え、「ブラジル日本語教育環境マップ調査」を各地で実施し、日本語教育状況の把握に努めました。

■仙田満氏(元日本建築学会会長)による「持続可能な建築」「子供の遊び環境」をテーマとする講演会を3都市で開催し、累計で約1,500人の聴衆を集めました。

マンガやアニメ、日本のポップカルチャーを積極的に紹介



琉神コンサート ©Mario Boccia

2009年度は関心が高まっている日本のポップカルチャーをテーマに、幅広い事業を展開しました。若者層に対するアピールになると同時に、他の伝統芸術の紹介などの文化事業にも関心をもってもらうきっかけになりました。

■7月に在イタリア日本大使館やイタリアの機関と協力しポップカルチャーを中心とする日本文化を紹介するイベント「Japanitaly」を開催し、映画上映、日本食・日本酒の提供などを行いました。また漫画家萩尾望都氏講演会や、メディア社会学者マルコ・ベッリッテリ氏講演会「アニメとマンガの文化政策」など漫画やアニメ文化の紹介が好評を博す一方、ローマ音楽財団との共催による沖縄エイサーチーム「琉神」のコンサートは、ローマ市が各国文化機関と連携した文化紹介計画のオープニングイベントとなりました。

■初級から上級まで幅広い層を対象とした日本語講座は年間のべ受講者が486人でした。また、日本人ボランティアとテーマを決めてフリートークを行う「わいわいしゃべりあーも」は、好評のため月2回の開催となり、参加者は200人となりました。

他機関との連携でより多くの知的交流の機会を創出



日仏知的交流シンポジウム「危機を考える」

学術研究機関や他の日仏交流機関との連携を図り、前年度の倍以上の講演会やシンポジウム等の事業を実施しました。

■日本のジャズを紹介する「ジャズインジャパン」フェスティバルでは、寺井尚子氏ほか日本を代表する女性ミュージシャンのコンサートを実施し、ラジオでも放送されるなど好評を博しました。東京都写真美術館との共催により実施した展覧会「出発(たびだち)6人のアーティストによる旅」は、写真ビエンナーレ「PHOTOQUAI」と提携し、観客は6,621人でした。

■中等教育機関の日本語教師研修会をフランスで初めて実施したほか、アルザス欧州日本学研究所との共催による教師研修は、欧州21カ国約40人による情報共有とネットワーク強化の場となりました。

■国際的な課題に対して日本の知見を生かすための日仏知的交流シンポジウム「危機を考える」には145人が参加し、日本の研究者の発表記事がル・モンド紙に掲載されたほか、279人が来場した「加藤周一 あるいは文化多様性の考察」では、各国から日本研究分野以外の研究者や文化人が参加するなど幅広い反響を呼びました。

開館40周年を迎え多彩な記念事業を展開、ドイツ語圏地域にさらなるアピールを



細江英公写真展

40周年記念行事の一環として、記念式典のほか学者・文化人の寄稿による記念誌を発行。ドイツで関心の高い日本の伝統文化に加えて、若者層にアピールするポップカルチャーやJ文学、現代演劇などを積極的に紹介しました。

■基金主催の巡回展「ウィンターガーデン」のプレミア開催をはじめ、ポップな日本映画を集めた「ジャパン・ポップ」特集、日本の現代文学を紹介する講演会の開催など、日本の「いま」を伝える事業を展開したほか、和菓子や華道のワークショップ・講演・デモンストレーションで日本文化を紹介。細江英公写真展は外部団体・企業の協力のもと1,353人の観客を集めました。

■日本語のパイロット講座の内容を全体的に改善したほか、日本語教育の団体と協力してネットワークづくりを強化。ベルリンなど旧東独地域の日本語教師への研修会を実施しました。

■日独共通である高齢化問題をめぐり、高齢者の「生活の質」をテーマとするシンポジウムを開催。また、ハイデルベルク大学の修士課程として日独通訳者養成コースの設置へ協力しました。

斬新な切り口で日本文化を紹介、関心を高める情報発信をめざす



江戸太神楽の傘回しの曲芸に挑戦

日英外交関係樹立150周年を祝った2008年を終え、2009年度は事業のさらなる展開と地方都市への拡大を強化した結果、3カ年で在外事業件数は約50%増、事業参加者は2倍、メールマガジン購読およびウェブサイトアクセスも30%増を超える成果となりました。今後もアクセスを強化し、ユニークな切り口の日本文化紹介を、ロンドンにとどまらず英国各地へ展開していきます。

■日本の音楽の多様性を紹介するアーティストトークや講演会を5回実施し、320人を超える聴衆を集めたほか、けん玉と江戸太神楽の専門家を日本から招き、5都市で約1,000人の観客を集めました。

■「大学生のための日本語スピーチコンテスト」は初級者のためのグループ・プレゼンテーション部門の新設で、スピーチ部門と併せて185人の応募があり、日頃の学習成果を競う機会となりました。

■国際シンポジウム「Cultural Heritage? in East Asia」を開催、日中韓の文化遺産に関する専門家15人を招き、80人の聴衆とともに議論を行ったほか、アーサー・ストックウィン名誉教授(オックスフォード大学)の国際交流基金賞受賞を記念した講演会を開催しました。

欧州 | **マドリッド日本文化センター**

マドリッドに センターを設置、 日本とスペインの 文化の架け橋に



能に関する講演会（バルセロナ）

マドリッド日本文化センターの開設は、マドリッド市が進める日本との関係強化プログラム「プラン・ハポン」の一環として誘致を受けて実現しました。市のほかスペイン国内の各文化機関との協力・連携のもと、文化センターの仮事務所を国際交流基金と連携関係にある「カサ・アジア」内に設置。2010年春の開設に向けて準備を進めました。

センターの正式なオープンに向け、開所記念事業となる能楽公演（2010年4月）の準備を進めるいっぽうで、能楽に関する理解を深める目的で、能装束研究家を日本から招いての講演会や展示会、スペイン人の日本研究者による能に関する講演会、また能と関係の深い黒澤明監督作品の上映会などのプレイベントをスペイン各都市で開催しました。

欧州 | **ブダペスト日本文化センター**

日本・ドナウ交流年に 豊かな日本の 文化を紹介し 交流を深める



八王子車人形のワークショップ

日本とハンガリーの国交樹立140周年および国交再開50周年となる2009年には、「日本・ドナウ交流年」として多数の日本文化紹介事業が行われました。また中東欧地域14カ国を管轄する広域事務所として、地域全体への日本文化紹介や日本語事業に継続的に力を入れました。

■「WA：現代日本のデザインと調和の精神」展を国立工芸美術館と共催、日本の優れたプロダクトデザイン160点を展示し、5,000人以上が来場しました。また、交流年のクロージング事業として、人間国宝、鶴賀若狭掾氏と西川流家元、西川古柳氏を招き、新内淨瑠璃と八王子車人形の公演をブダペストの劇場で開催し、2日間の公演で860人の観客を動員しました。

■中東欧諸国11カ国の教師に向けた「中東欧日本語教育研修会」をブダペストで実施、47人が参加し、地域内のネットワーク強化に貢献しました。また、「日本ハンガリー協力フォーラム事業」の一環として、ハンガリー国内の10の日本語教育機関に対する講師雇用の支援を行いました。

欧州 | **全ロシア国立外国文献図書館** 「国際交流基金」文化事業部
(モスクワ日本文化センター)

日露文化交流の 拠点として 活動を拡充



日本文化出前講座「伝統の遊び」

2008年7月の開設後、2009年度には、施設・インフラの整備や事業のいっそうの拡充に努め、9月には公式ウェブサイトも開設しました。ロシア在住の日本専門家・研究者を招き定期的に開催している「日本理解講座」や生け花・書道などの日本文化のデモンストラクションが好評を博しているほか、子どもや若者を対象とした日本文化出前講座や研究発表会も日本文化の理解に寄与しています。

■ロシア初となる文楽公演「曽根崎心中」を「第8回チェーホフ国際演劇祭2009」の招待で上演。8日間で4,800人の観客を動員しました。

■初中等教育機関20カ所に日本語・日本文化教材キット「かばんの中の日本」（2008年製作）を貸し出し、授業等で積極的に利用してもらいました。

■「グローバル化の中でのアジア太平洋地域における日ロ関係の展望」をテーマに、第6回日露フォーラムを開催（ロシア現代発展研究所共催）。両国の有識者・政府関係者約50人が参加しました。

中東 | **カイロ日本文化センター**

エジプトの若者に 日本の文化を届け 高い関心を 呼び起こす



永井豪氏の講演会（芸術アカデミー高等映画学院）

2009年は、エジプトの人口の半数以上を占める若年層に向けて、アクセスしやすい場を活用して日本に対する関心を高め、共感を呼ぶ分野やテーマに焦点をあてた事業を多数計画し、展開しました。

■90年代にアラブで放映され高い人気を集めた日本のロボットアニメ「マジンガーZ」の作者である、漫画家の永井豪氏の講演会は大きな反響を呼びました。また、第2回カイロ・ジャズフェスティバルへTokyo Freedom Soulを招いたほか、日本映画祭では「下妻物語」をはじめとする近年の若い世代による日本映画を上映し、好評を博しました。

■中東地域における日本語教育を拡充・発展させるための基礎インフラの整備として、JF日本語教育スタンダードの紹介や普及に努めたほか、日本語の一般講座の拡充を行い、入門講座の新設など日本語と日本文化を気軽に楽しく学べる機会を増やしています。

■大学への客員教授派遣や、日本研究入門集中講座に対する支援を行ったほか、中東知的交流グループ研修への若手研究者の招へいなどを通じ、社会科学系の日本研究者の育成にも着手しました。

国際交流基金からの情報発信

国際交流基金は、国際交流に関心をもっている方や、日本文化についての情報を求める方のために、以下のようにさまざまな形で情報を発信しています。

WEB

ホームページ、メールマガジンでの情報発信

国際交流基金の事業紹介、イベント告知などの最新情報、助成金申請情報、便利な日本語教材、過去に行った調査報告、海外拠点のウェブサイトへのリンクなど、国際交流基金を利用する方にとって役に立つ、さまざまな情報を国際交流基金ホームページ上で発信しています。

- 国際交流基金ホームページ → <http://www.jpff.go.jp/>
- メールマガジンへの登録 → 国際交流基金HP → メールマガジン

ブログ、ツイッターでの情報発信

ブログやツイッターを利用し、即時性の高い情報発信も行っています。

- ブログ「地球を、開けよう。」 → <http://d.hatena.ne.jp/japanfoundation/>
- ツイッター → @japanfoundation

ウェブマガジンでの情報発信

冊子形式で定期的に発行していた国際文化交流専門誌『をちこち』を、ウェブマガジンにすることにより、情報の豊かさはそのままに、より多くの人々がアクセスできる形に進化させました。2010年8月より公開しています。

をちこちMagazine → <http://www.wochikochi.jp/>

分野別の専門的な情報発信

国際交流基金が独自の活動により収集したデータベースや、日本語教材を専用のサイトを通じて発信しています

- 日本のアーティスト・イン・レジデンス「AIR_J」 → <http://www.air-j.info/>
- 舞台芸術情報「Performing Arts Network Japan」 → <http://performingarts.jp/>
- 日本に関する書誌情報誌『Japanese Book News』(英語) → 国際交流基金HP → 刊行物・グッズのご案内 → JF 定期刊行物
- 日本語能力試験 (JLPT) → <http://www.jlpt.jp/>
- アニメ・マンガの日本語 → <http://www.anime-manga.jp/>
- みんなの教材サイト → <http://minnanokyozai.jp/>
- 日本語でケアナビ → <http://nihongodecarenavi.jp/>
- インターネット日本語しけん「すしテスト」 → <http://momo.jpff.go.jp/sushi/>
- WEB版「エリンが挑戦! にほんごできます。」 → <https://www.erin.ne.jp/>

ライブラリー

ライブラリーでの情報サービス

本部オフィスの1、2階にあるJFICライブラリーでは、専門司書のサポートのもとで国際交流基金の事業に関する資料や、国際文化交流や日本文化に関する資料の閲覧、各種データベースの利用が可能です。また国際交流基金が主催した展覧会のカタログや出版物の販売も行っています。

JFICライブラリー [国際交流基金本部/新宿区四谷]

ライブラリーには、蔵書約35,000冊以外に、新聞、雑誌で紹介された国際交流基金の事業を紹介するクリッピングファイル等を用意しています。これらの資料はウェブサイト上で、OPACによる蔵書検索が可能です。

開館時間：10:00-19:00 (月曜日-金曜日)、10:00-17:00 (第3土曜日)

休館日：日曜日、祝日、毎月最終日、第1、2、4、5土曜日、開館した土曜日の次の月曜日、年末年始、蔵書点検期間

*このほかに臨時休館の場合もあります。利用される方は国際交流基金HPにある「休館日カレンダー」を参照してください。

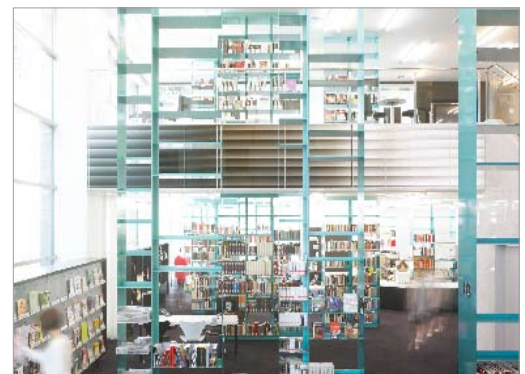
問い合わせ：TEL. 03-5369-6086 / E-mail. Lib@jpff.go.jp



国際交流基金 HP より



ウェブサイト「をちこち Magazine」より



JFIC ライブラリー

訪問

国際交流基金の個別訪問の受付

国際交流基金では、大学生や、国際交流に関心のあるグループなどの見学を受け付けています。大学のゼミなどの一環として、どうぞご利用ください。日本語国際センターや関西国際センターでも見学を受け付けています。問い合わせ：

本部情報センター JFIC (東京都)：TEL. 03-5369-6075
日本語国際センター (埼玉県)：TEL. 048-834-1180
関西国際センター (大阪府)：TEL. 072-490-2600

資料

Appendix

1—日本文化紹介派遣

主催……34件(66カ国121都市) 助成……63件(46カ国99都市)

落語、アニメ、建築、書道、食文化など日本の文化16分野の、以下の方々をはじめとする専門家を世界各地に派遣し、講演、デモンストレーション、ワークショップを行いました。

●藤田千恵子(フードライター)／紫舟(書家)／山口正人(「彩雲堂」和菓子職人、以上P.15参照)／桂かい枝(落語家)／坂茂(建築家)など

2—文化人招へい

文化人招へい……38名(26カ国)

文化の諸分野において大きな影響力をもつ、以下の方々をはじめとする各国の文化人を招へいし、日本の実情視察、関係専門家などとの意見交換を行いました。

●ウスタード・グルザマン(音楽家/アフガニスタン)／ペーテル・ブダイ(料理専門家/ハンガリー)／モハメド・ガウス・ピン・ナスルディン(国立芸術文化遺産大学学長/マレーシア)など

3—文化協力

主催……6件(7カ国8都市) 助成……10件(10カ国17都市)

トルコのカマン・カレホユック考古学博物館展示・陳列指導(P.15参照)、レバノン柔道連盟競技者技術指導、シリア・ヨルダンのデジタルアニメ分野における人材育成などに協力しました。

4—市民青少年交流

主催……2件 助成……118件

○日本のふろしき活用ワークショップ…インドネシアのジャカルタで開催されたエコプロダクツ国際展の会場において、環境教育の一環として開催、ベトナムにも巡回しました。

○米国の現代美術専門のキュレーター招へい(6名)…日本の芸芸との交流を行いました。

○環境問題・環境教育に取り組むNGO／NPO関係者および初等・中等教育の関係者招へい(40名、14カ国)…21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)プログラムの一環として、「環境-自然との共生と持続可能な循環社会」をテーマに、環境分野に関わる日本の取り組みを紹介し、シンポジウムを開催しました。

5—中学高校教員交流

世界各国の中学・高校教員招へい……190名(53カ国)

海外の青少年の日本理解および国内の異文化理解の促進を目的に、長野県・福井県・さいたま市(埼玉県)・大垣市(岐阜県)・富士市(静岡県)・奈良市(奈良県)を訪問し、各地で学校訪問、文化施設などの視察や交流を行いました。

6—開高健記念アジア作家講演会シリーズ

故開高健氏の遺族からの寄附金をもって、1990年度から実施して

いるアジア作家の講演会シリーズ。第19回目にあたる2009年度は、タイから若手作家のウティット・ヘーマムーンを日本に招へいし、国内4カ所(東京、福岡、大阪、函館)で講演会を行いました(P.15参照)。

7—国際展

第53回ヴェネチアビエンナーレ美術展(コミッショナー:南薫宏、出品作家:やなぎみわ)に日本代表として参加しました。

8—海外展

主催……7件(7カ国9都市) 助成……50件

海外および日本国内の美術館などとの共催で、以下をはじめとする、さまざまな展覧会が実施されました。

●「TWIST and SHOUT: Contemporary Art from Japan」展(P.12参照)／「WA:現代日本のデザインと調和の精神」展(ハンガリー、ドイツ、ポーランド)／「Flickers: new media art from Japan」展(ベトナム)／「出発(たびだち) 6人のアーティストによる旅」展(フランス)／「Kami: 静と動—現代日本の美術」展(ドイツ)など

○展示セットによる世界巡回展[18セット、98件(57カ国97都市)]

海外の美術館等との共催で、伝統から現代まで幅広い分野を扱う展示セットが各国に巡回する展覧会を実施しました。

「スピリットを写す:日本の現代写真」／「自然に潜む日本」／「日本の子ども60年展」／「ウィンター・ガーデン:日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」などが展示セットに含まれました。

9—国内展

これまで十分には日本で紹介されてこなかった海外の優れた美術を紹介する目的で、「アヴァンギャルド・チャイナ」展を愛知県美術館との共催で実施、中国人アーティスト6名を招へいしました。

10—造形美術情報交流

国際交流のための基盤とネットワークづくり……4件(10カ国)

○第5回アジア次世代美術館キュレーター会議…アジアの美術館のネットワーク構築を目指し、シンガポールとマレーシアで開催。

○オーストラリア人ポップカルチャー研究者招へい

クリエイティブな分野/産業に従事する若手クリエイターを日本に招へい

……21名(13カ国)

21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)プログラムの一環として、アーティスト、デザイナーなどを日本に招き、作品制作やネットワーク構築のための機会を提供しました。

11—海外公演

主催……26件(63カ国93都市) 助成……98件

以下をはじめとする海外公演を主催しました。

●音楽ロシア公演/中央アジア・コーカサス巡回音楽公演/沢知



[左] ウティット・ヘーマムーン(作家/タイ) 講演会
[中] 「TWIST and SHOUT」展カタログ
[右] 「ウィンター・ガーデン」展カタログ

恵韓国公演(以上3件)／喜多流大島能楽堂による北欧能公演(フィンランド、スウェーデン)／沖縄民謡インド巡回公演／串田アキラ中米巡回公演(グアテマラ、パナマ、コスタリカ、エルサルバドル)など

○助成プログラム「パフォーミングアーツ・ジャパン(PAJ)」を通じて26件の助成…日本の優れた舞台芸術作品を紹介する米国、欧州の文化芸術団体に対して行いました。

12—国内公演

日本人指揮者柳澤寿男が率いるバルカン室内管弦楽団(コンゴ、セルビア、マケドニアの音楽家により構成)による日本公演を実施しました。

13—国際舞台芸術共同制作

実施……2件(2カ国4都市)

○日本・インドネシア共同制作舞踊作品「ガリババの不思議な世界」公演…日本の現代舞踊カンパニー「パパ・タラフマラ」とインドネシアの芸術文化団体ケローラ財団との共催により、インドネシアで実施しました。

○日本・タイのコンテンポラリーダンス共同作品「コウカシタ」…フェスティバル/トーキョーとの共催で、井出茂太の振付による作品をタイのバンコクとチェンマイで上演しました。

14—舞台芸術情報交流

実施……8件

国内外の舞台芸術団体、プレゼンター、フェスティバル実施団体、劇場間の情報交流促進を図るため、「東京芸術見本市2010」や、日本の舞台芸術情報を日本語・英語のバイリンガルで発信するウェブサイト「Performing Arts Network Japan」(<http://www.performingarts.jp/>)などの事業を実施しました。

15—日本理解促進出版・翻訳

助成……76件(24カ国)

日本語で書かれた優れた図書(人文/社会科学/芸術分野)の外国語への翻訳および外国語で書かれた日本文化紹介図書の出版を支援する公募プログラムを通じ助成を行いました。

16—国際図書展

海外開催の国際図書展に共同参加……16件(16カ国16都市)

日本の出版文化の紹介と対日理解促進のために、社団法人出版文化国際交流会等と共同参加しました。

○第8回バンコク国際図書展(テーマ国、日本)

○第11回モスクワ国際知的図書展non/fictionなど

17—テレビ番組交流促進

日本のテレビ番組の提供……35件(33カ国)

日本のテレビ番組の海外放映を促進するため、エルサルバドルへ『ワンダー数学ランド』や『ワザありにっぽん』シリーズの番組提供

などを行いました。

18—日本理解促進映画・テレビ番組制作

映画とテレビ番組の制作費助成……9件(8カ国)

海外における日本理解を促進するため、キューバの日系移民とその子孫たちに関するドキュメンタリー(キューバ)など、日本に関する映画と番組制作に対し助成しました。

19—海外日本映画祭

日本映画祭・日本映画上映会……57件(52カ国)

海外の国際映画祭での日本映画上映への助成……57件(26カ国)

日本映画祭や日本映画の上映を、以下のとおり在外公館・海外文化機関等と共同開催しました。

○フィリピンの日本映画祭「Eiga-sai 2009」事業

○ミャンマーでの日本映画祭(「日メコン交流年」記念行事)

○ベトナムでの巡回映画祭など

さらに他団体主催の事業を助成することで、日本映画が海外で上映される機会をつくりました。

20—国内映画祭

日本で紹介される機会の少ない諸外国の映画を紹介する目的で、東京国際映画祭において、昨年夏に急逝したマレーシアの女性監督ヤスミン・アフマドの特集上映や山形国際ドキュメンタリー映画祭の「アジア千波万波」部門の上映を共同開催しました。

21—映像・出版情報交流

○季刊誌『Japanese Book News』(No.60~63)刊行…海外の出版社・翻訳者向けの日本の文芸の情報誌を刊行

○『New Cinema from Japan』共同発行(年2回)…日本映画の基本情報を海外に提供する内容の書籍をユニジャパンと共同で発行

○「国際交流基金ポラナビ著作/翻訳賞」授与…韓国で日本に関する著述活動を行っている優れた著述家を表彰

22—国際漫画賞・アニメ文化大使事業への協力

海外でマンガの普及啓蒙活動に貢献する新進のマンガ作家を顕彰する「国際漫画賞」(主催:国際漫画賞実行委員会)の最優秀賞受賞者と優秀賞受賞者計4名を日本に招へいするとともに、海外におけるアニメ文化大使(ドラえもん)の外国語字幕付DVDの上映会に協力しました(43回、27カ所)。

23—日中交流センター

2009年度は「中国高校生長期招へい事業」として第4期生35名を招へい、「ふれあいの場」が青海省西寧市、江蘇省連雲港市、黒龍江省ハルビン市に新たに開設されました。また「心連心WEB」のアクセス数も増加し、日中の若者の交流を促進しています。

[左] ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」

[中] 『Japanese Book News』

[右] 『New Cinema from Japan』と日本映画および映画産業についての書籍2冊



海外における日本語教育事業概観

1—海外日本語教育機関のネットワーク形成と強化

①日本語教育機関などの調査

海外日本語教育に関する以下の調査を行いました。

- 日本語教育機関調査2009年
- 日本語教育国・地域別情報

②日本語教育情報交流

下記の日本語教育関係資料を刊行し、配布およびウェブサイトで公開したほか、図書館に寄贈しました。

「日本語教育通信」(ウェブサイト)

『国際交流基金日本語教育紀要』6号(冊子・ウェブサイト)

③外国人による日本語弁論大会

「第50回外国人による日本語弁論大会」を、北海道函館市で開催しました。

④JFにほんごネットワーク

2008年度からの3年間で海外の中核的日本語教育機関100機関との連携を目指す「JFにほんごネットワーク(通称さくらネットワーク)」では、合計74機関を中核メンバーとして選定し、これらの機関によるセミナー、巡回指導、教材開発などを支援しました。

⑤日本語教育専門家等派遣

海外における日本語教育の中核となる機関に対して、以下の通り日本語教育専門家、ジュニア専門家などを派遣しました。また、日本語教師養成課程を有する日本国内の大学・大学院との連携により海外日本語教育インターンの派遣を行いました。加えて、2010年度に派遣する日本語教育専門家などに対して、業務に必要な専門知識・技能に関する派遣前研修を実施しました。

- 日本語教育専門家：35カ国、63件
- ジュニア専門家：19カ国、32件
- 海外日本語教育指導助手：7カ国、7件
- 海外日本語教育インターン：20カ国、244件
- 日本語教育専門家等派遣前研修：1件

⑥21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

JENESYSプログラムの一環として受託し、大学で日本語教育を専攻した若手日本語教師を以下のとおり東アジア諸国に派遣しました。

- 若手日本語教師派遣：13カ国、58名

⑦日本語教育機関支援・日本語教育プロジェクト支援

海外において日本語教育の中核となる機関に対して、次のとおり各種助成を実施しました。また海外における日本語教育を支援する日本語教育学会に対して助成を行いました。

- 海外日本語講座助成(現地講師謝金)：22カ国、36件
- 海外日本語弁論大会助成：62カ国、94件
- 海外日本語教育ネットワーク形成助成：19カ国、25件
- 海外日本語教育学会助成：1件

2—日本語能力試験

2009年度から実施を年2回化し、7月および12月に日本語能力試験を実施しました。海外52の国・地域(台湾除く)での受験者数は、555,849人(前年比42.3%増)でした。

あわせて、2010年度からの改定新試験開始に向け、新試験の模擬試験(試行試験)を行ったほか、改定内容の周知のため新試験のガイドブックと問題例集を発行しました。

また、『平成19年度日本語能力試験 分析評価報告書』の出版や、年少者向けインターネット日本語テスト「すしテスト」の運営も行いました。

3—日本語国際センターにおける研修事業

①海外日本語教師研修・指導的日本語教師の養成など

日本語国際センターにおいて、海外の日本語教師を招へいし、以下の教師研修を実施しました。また、研修生と地域住民の交流など、地域のニーズに配慮した事業を併せて実施しました。

- 海外日本語教師長期研修：29カ国、44名
- 海外日本語教師短期研修：38カ国、96名
- 韓国高校日本語教師研修：56名
- 中国(大学・中等学校)日本語教師研修：59名
- インドネシア中等日本語教師研修：20名
- タイ人日本語教師短期訪日研修：18名
- マレーシア中等教育日本語教師研修：7名
- 日本語教育指導者養成プログラム(修士課程[新規])：6カ国、8名
- 日本語教育指導者養成プログラム(修士課程[継続])：5カ国、6名
- 日本語文化プログラム(博士課程[新規])：1カ国、1名
- 日本語文化プログラム(博士課程[継続])：4カ国、4名
- 海外日本語教師上級研修：6カ国、8名

上記研修に加えて、JET参加者を対象とした日本語教授法の研修を実施しました。

- 全国JET教授法研修：10カ国、29名

②21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

- 東アジア若手日本語教師特別招へい研修：11カ国、39名
- 南アジア若手日本語教師特別招へい研修：5カ国、19名
- メコン若手日本語教師特別招へい研修：5カ国、10名



[左] 国際交流基金 HP 内で日本語教育に関する情報を提供するコンテンツ「日本語教育通信」
[中] 『日本語教育紀要』6号
[右] 教授法シリーズ『文法を教える』

⑥その他の受託事業として、以下の研修を実施しました。

- 海外教師日本研修プログラム：10カ国、13名
- 大連市中学校日本語教員研修：1カ国、1名
- ロシア若手日本語教師研修：1カ国、7名

4—日本語教材開発・制作支援

①日本語教材自主制作・普及

2009年度は、以下のように日本語教材の自主制作と普及を行いました。

○「エリンが挑戦！にほんごできます。」(映像教材/ウェブサイト)
NHK、NHKワールドなどで再放送。ブラジル、スリランカ、韓国、フィンランドの4カ国のテレビ局で放送(現地語の字幕・吹替版)。また、日本語が初めての学習者でも楽しく学べ、ゲームやクイズを楽しみながら日本文化を理解できるWEB版「エリンが挑戦！にほんごできます。」をオープン。

○『国際交流基金 日本語教授法シリーズ』(書籍)
全14巻のうち、第4巻『文法を教える』を出版。

○「みんなの教材サイト」(ウェブサイト)
素材検索機能とコミュニティ機能を拡充、教材用素材を追加。アクセス件数は534万件。

○「日本語でケアナビ」(ウェブサイト)
場面からの例文検索機能を追加。アクセス件数は74万件。

○「アニメ・マンガの日本語」(ウェブサイト)
アニメ・マンガに現れる多様な日本語(台詞、擬態語、擬声語等)を通して、日本語を学習できるウェブサイトを開発。アクセス件数は、2010年2月の公開から2カ月間で50万件。

○「JF日本語教育スタンダード」
2010年3月にウェブサイトを開発。JF日本語教育スタンダード第1版として、「JF日本語教育スタンダード2010」を発表。あわせて、同ウェブサイトにおいて、能力記述文(「Can-do」)を検索、編集するための「みんなの「Can-do」サイト」を発表。

②日本語教材寄贈

海外の日本語教育機関に対し、現地では入手しにくい日本語教材を寄贈しました(95カ国、800件)。

③日本語国際センター図書館

日本語教育専門図書館として、図書・視聴覚資料44,616点、雑誌・紀要等673誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました。

5—関西国際センターにおける研修事業

①専門日本語研修・日本語学習者訪日研修など

関西国際センターにおいて、海外における日本語学習者支援の観点から、国際交流基金以外の機関では十分に教育を行うことが難しい専門性の高い日本語研修、日本語学習奨励研修などを以下のとおり実施しました。また、研修生と地域住民の交流など、地域のニーズに配慮した事業をあわせて実施しました。

- 専門日本語研修(外交官)：23カ国、23名
- 専門日本語研修(公務員)：5カ国、5名
- 専門日本語研修(研究者・大学院生)：20カ国、45名
- 日本語学習者訪日研修(大学生)：30カ国、51名
- 日本語学習者訪日研修(各国成績優秀者)：50カ国、54名
- 日本語学習者訪日研修(高校生)：17カ国、32名
- 日本語学習者訪日研修(李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業)：1カ国、30名
- アジア・ユース・フェローシップ高等教育奨学金訪日研修：10カ国、18名
- 大学連携大学生訪日研修：18カ国、100名
- 大阪府クィーンズランド州日本語教師研修：1カ国、5名
- インドネシア人介護福祉士候補フォローアップ研修：1カ国、34名
- 大阪府JET来日時研修：7カ国、35名
- 在日外交官研修：17カ国、19名

②21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)受託事業

- 東アジア日本語移動講座：4カ国、40名
- 東アジア日本語履修大学生(春季)：4カ国、20名
- 東アジア日本語履修大学生(夏季)：9カ国、30名
- 東アジア日本語履修大学生(秋季)：2カ国、8名
- 南アジア日本語履修大学生：6カ国、39名

③その他の受託事業として、以下の研修を実施しました。

- ニュージーランド日本語教師日本語研修：3名
- インドネシア大学生日本語研修：2名
- 香港中文大学大学生訪日研修：10名
- オーストラリア日本語教師訪日研修：10名

④業務委託

競争の導入による公共サービスの改革に関する法律(平成18年法律第51号)第14条に基づき、在日外交官研修を国際日本語普及協会に業務委託し、実施しました(17カ国、19名)。

⑤関西国際センター図書館

日本の文化・社会を紹介する資料を中心に、図書・視聴覚資料45,270点、雑誌等285誌を所蔵し、情報・資料の提供を行いました。

[左] ウェブサイト「みんなの教材サイト」
[中] ウェブサイト「日本語でケアナビ」
[右] ウェブサイト「みんなの「Can-do」サイト」



日本研究・知的交流事業概観

1——日本研究機関の支援

各国において日本研究の中核的な役割を担う機関が、その研究基盤を強化し優れた人材を育成できるよう、各機関が必要とされるさまざまな事業への支援を実施しました。2007年度より、各機関のニーズに応じて、客員教授派遣、研究・会議助成、教員拡充助成、図書拡充などを組み合わせて、包括的な支援を行うシステムに移行しています。

①米国、カナダ、中南米地域における機関支援 [16機関]

米国…コロラド大学／バージニア大学／ハワイ大学／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター／北米日本研究資料調整協議会など

中南米…エル・コレヒオ・デ・メヒコ／メキシコ工科大学／サンパウロ大学／ブラジリア大学など

②アジア・大洋州地域における機関支援 [26機関]

東アジア…ソウル大学／南開大学／復旦大学／モンゴル国立大学など

東南アジア…インドネシア大学／チュラロンコン大学／タマサート大学／フィリピン大学／マラヤ大学／ハノイ国家大学など

南アジア…ジャワハルラル・ネルー大学／デリー大学

豪州…オーストラリア国立大学

③欧州・中東・アフリカ地域における機関支援 [23機関]

欧州…ミラノ国立大学／ヴェネチア大学／サラマンカ大学／ルーヴァン・カトリック大学／タシケント国立東洋学大学／ザグレブ大学／ソフィア聖クリメント・オフリドスキ大学など

中東…バグダッド大学／テヘラン大学／アインシャムス大学など

④北京日本学研究所事業

北京外国語大学に設置された北京日本学研究所に対して、日本人教授など、のべ15名を派遣して講座の運営を行ったほか、大学院生およびスタッフ22名の日本への招へい、研究・出版に対し支援を行いました。また北京大学に設置された現代日本研究センターに日本人教授のべ11名を派遣したほか、大学院生・講座関係者24名を日本に招へいしました。

2——日本研究フェローシップ

長期……学者・研究者82名(28カ国)・博士論文執筆者101名(30カ国)

短期……研究者35名(19カ国)

国際交流基金は、設立当初より日本に関わる研究を行う学者・研究者を日本に招へいするフェローシッププログラムを実施しており、これまでに4,500名以上が海外から日本を訪れて研究や調査を行い、日本の専門家との人的ネットワークを築いています。2009年度は上掲の通りのフェローが日本での調査研究活動を行いました。また、その研究成果の発表の場として、公開講座(フェローセミナー)を本部と京都支部で企画実施しました。

3——日本研究ネットワーク強化

支援……9件

国および専門分野を越えた日本研究者の横断的な協力・連携ネットワーク形成のため、次のような支援を行いました。

日本研究者の集まる日本関連学会の年次総会の開催

中国での日本研究調査の実施とともに、東南アジア各国と日本との相互理解の促進を目的に、ASEAN諸国の元日本留学生会の活動を支援しました。

4——知的交流会議などの開催・支援

国際会議・知的対話事業の企画・実施…25件

会議開催経費・参加者旅費の支援…81件

世界・地域の共通課題に取り組むため、以下をはじめとする知的交流事業の開催と支援を行いました。

①中国知識人グループ招へい(2009年11月、2010年1月)

中国の主要な知識人と、日本側関係者との将来につながる知的ネットワークの構築を目的とする事業。従来日本とのつながりが少なかった中国の知識人8名のグループを9日間招へいし、日本人研究者との意見交換・各種機関訪問・地方都市訪問などを実施しました。

②社会的企業を巡る日韓対話(2010年1月28日～29日)

日本と韓国で、社会のさまざまな問題に取り組むために社会的企業を立ち上げて運営している実践者および社会的企業の研究者などが一堂に会し、ソウルで会議および公開シンポジウムを実施しました。社会の構造が比較的似ている日韓両国で類似の問題に携わる関係者同士の対話の場として、有益な事業となりました。

③中東知的交流巡回セミナー(エジプト、バーレーン 2010年3月)

「国の発展と環境とのバランス～過去の経験を未来に生かす～」をテーマに、日本の有識者2名をエジプトとバーレーンに派遣し、日本の戦後の産業発展と環境破壊の克服についての紹介や日本の伝統的エコシステムの一例である里山とアラビア半島の伝統的自然資源管理「ヒマ」の対比を現地の政府関係者、学者、研究者および学生とともにしながら、急速な発展にともない環境負荷が増加している同地において、発展と環境のバランスをいかに構築するかについて議論を行いました。

④日亜交流シンポジウム(2010年1月15日)

日本とアルゼンチンの文化交流の進展と相互理解促進のため、両国から文学、芸術、メディアなどの異なる分野に携わる有識者を招き、両国間の文化交流をめぐる今後の展望について話し合うシンポジウムを、都内にて開催しました。日本・アルゼンチン双方の外務省、在日アルゼンチン共和国大使館、在アルゼンチン共和国日本大使館との共催で行われました。

⑤ジョン・ホールデン講演会(2010年3月6日)

英国の代表的シンクタンクDEMOSのジョン・ホールデン元文化部長の来日の機会に、国際交流基金、ブリティッシュ・カウンシル、企業メセナ協議会が共催し、同氏の講演と国内有識者とのパネルディスカッションを行いました。テーマは「文化外交は今後誰がどのように、そして何のために推し進めていけばよいのか」。外交の場面においてますます重要性を増している文化の役割について、白熱した議論が展開されました。

⑥米国ジャーナリズム専攻大学院生招へい事業(2009年8月16日～25日)

米国エマーソンカレッジに対する助成事業として、米国の大学でジャーナリズムを専攻する大学院生を、プロのジャーナリストになる前の段階で日本に関する認識を深めてもらうことを目的に、10日間、日本に招へいしました。参加者は、外交、経済、市民活動などの専門家と対話を重ねました。帰国後「ジャーナリストとしての原点を確認した」等の感想が参加者から寄せられ、日本の報道機関に就職する者も出るなど成果があがっています。

⑦東南アジア若手イスラム知識人グループ招へい(2009年11月)

インドネシア、マレーシア、フィリピンでイスラム研究を専門とする若手大学講師7名が、日本を例にとった社会の近代化とイスラムの調和をテーマに、日本の研究者による講義および意見交換を通して日本理解を深めました。また、2010年3月にはインドネシア・ジャカルタの国立イスラム大学において、7名の参加者によるセミナーの形式でフォローアップ事業を実施し、研究者、学生を中心とした聴衆に日本での体験を還元することができました。

5——知的交流フェローシップ

招へい……23件

日本との知的対話のネットワーク構築を目的として、現代社会の共通の課題を研究する東欧、中東、およびアフリカ地域の人文・社会科学の若手研究者に、訪日調査、研究の機会を提供しました。

6——知的リーダー交流

「アジア・リーダーシップ・フェロープログラム」は、アジア各国で活躍する知識人に日本からの参加者を加えた合計7名が、東京で2カ月間をともに過ごしつつ対話を重ねる事業。参加者は、グローバルな課題などについて専門家のレクチャーを受けるとともに、集中的な意見交換を行うことにより、日本の関係者との、そして参加者間のネットワークを形成しました。また、地方都市訪問などの各種プログラムを通して、日本社会・文化に関する理解を深めました。

7——東南アジア地域研究センター支援

東南アジア人による東南アジア研究の促進と域内の人材育成、また関係機関同士のネットワークの構築を目的とする東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP財団主催)を支援しました。

8——日米センター

主催・共催……15件

①安倍フェローシップ

日米の研究者など14名にフェローシップを供与し、現代の地球規模

の政策課題で緊要の取り組みが必要とされる問題に関する調査研究を促進し、日米の新しいパートナーシップとネットワーク形成を推進しました。またジャーナリストによる、より掘り下げた調査研究を通じて、日本および米国の相互理解に貢献する報道を支援する安倍ジャーナリスト・フェローに4名を採用しました。

②日米草の根交流コーディネーター派遣(JOI)プログラム

日本との交流機会が比較的少ない地域における草の根レベルの交流や日本理解の促進を目指し、新たに5名のコーディネーターを派遣しました。

③そのほか「日本-日系人交流促進プログラム」「国際関係論専攻大学院生招へいプログラム」「世界災害語り継ぎフォーラム」などを実施しました。

助成

①助成プログラム

「外交と安全保障：伝統的および非伝統的アプローチ」「グローバル経済、地域経済の抱える課題」「市民社会の役割」の3つを対象領域として日米の団体が共同で実施するプロジェクトを募集し、17件に対して助成を行いました。そのほか、米国における小規模助成を45件(知的交流助成4件、草の根交流2件、日本理解促進39件)実施しました。さらに企画参画型助成の枠などで17件を助成しました。

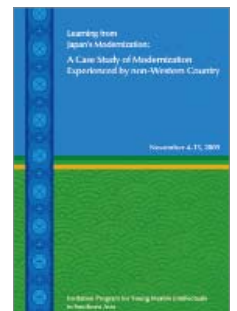
②日米交流強化イニシアチブ

2007年11月の福田総理(当時)訪米の際に発表された「日米交流強化イニシアチブ」(知的交流、草の根交流および日本語教育の強化の3本柱)の一環として、米国の5つのシンクタンク(戦略国際問題研究所、アメリカン・エンタープライズ研究所、ブルッキングス研究所、外交問題評議会、ランド研究所)に対する助成を行っているほか、米国の日米協会支援(8件)および在米日系人との交流強化事業を実施しています。

9——カルコン

日米文化教育交流会議(The United States - Japan Conference on Cultural and Educational Interchange: 略称CULCON: カルコン/米側事務局は日米友好基金: Japan-US Friendship Commission)は、2009年6月に東京で、フルブライト-カルコン合同シンポジウム「日・米ソフトパワー: 地球的課題への取り組み」を開催し、日米の政府関係者、経済界、学会、メディア、文化芸術団体、NPOおよびアジアのフルブライト奨学生および同窓生を含む約300名の参加を得ました。

[左] 欧州評議会との共催で専門家の招へいとシンポジウムを行った事業「インターカルチュラル・シティと多文化共生」報告書
[中] フリードリッヒ・エーベルト財団(ドイツ)との共催で東京で行なわれたシンポジウム「未来の子ども、子どもの未来」報告書
[右] 東南アジア若手イスラム知識人グループ招へいの成果をまとめた報告書



民間からの資金協力

国際交流基金は、企業、団体、個人など広く民間からの資金協力を仰いで国際文化交流事業を実施しています。ここでは2009年度時点での国際交流基金への寄附制度を紹介するとともに、同制度を通じて資金のご協力をいただいた法人、個人の方々、およびその協力により支援を受けた事業を紹介します。

1. 寄附の種類

[1] 一般寄附金

当基金の国際文化交流事業の経費の財源として活用します。

イ. 一般寄附金制度

法人、個人から、寄附の時期、金額とも任意で受け入れる寄附金です。2009年度に寄附をした法人および個人、ならびに寄附による実施事業例は次頁の「事業費への寄附者」「民間出えん金寄附者」「民間出えん金による支援事業」を参照してください。

(イ) 事業費への寄附

寄附金を受け入れた年度の事業経費として活用します。寄附者の希望により、実施事業の中から、寄附金を充当する事業を指定することも可能です。

(ロ) 基金(ファンド)への寄附(=民間出えん金)

寄附金を基金(ファンド)に組み入れ、その運用利息を毎年度の事業費として恒久的に活用します。

ロ. 会員制度

年会費として一定額の寄附金を受け入れ、受け入れた年度の事業経費として活用します。会員には、会員種類に応じて、出版物の配布や各種催し物への招待等の特典を提供しています。

(イ) 賛助会

企業、団体が対象。1口10万円(年額)で、普通会员(1~4口)と特別会員(5口以上)があります。2009年度の会員は次頁の「賛助会員」を参照してください。

(ロ) JFサポーターズクラブ(会員制度変更のため、JFサポーターズクラブは2010年1月31日をもって新規入会および継続手続きを停止しました)

個人、グループが対象。年会費はアソシエイト会員3,000円、アソシエイト学生会員2,000円、パートナー会員10,000円、グループ会員50,000円です。

[2] 特定寄附金

国内の企業や個人が国内外の国際文化交流事業を支援する場合に、特定公益増進法人である国際交流基金が、その支援資金を寄附金として受け入れ、対象事業への助成金として交付する制度です。本制度を利用することで、企業や個人は寄附金に対する税制上の優遇措置を受けることができます。

対象となる事業は、国際文化交流を目的とする人物交流、海外における日本研究や日本語教育、国際文化交流を目的とする公演・展示・セミナー等の催し等です。また、特定寄附金の受け入れは、

外部専門家で構成される審査委員会への諮問を経て決定します。2009年度の支援事業は次頁の「特定寄附金による支援事業」を参照してください。

2. 税制上の優遇措置

当基金は法人税法施行令第77条および所得税法施行令第217条により「公益の増進に著しく寄与する法人」(特定公益増進法人)に指定されており、上述の寄附は税制上の優遇措置の対象となります。

(1) 法人の場合

通常の寄附金とは別枠で、特定公益増進法人に対する寄附金の合計額と特別損金算入限度額とのいずれか少ない金額が損金に算入されます。寄附金の損金算入限度額は次の算式によります。

●通常の寄附金

$[資本金等の額 \times 当期の月数 / 12 \times 2.5 / 1,000 + 所得の金額 \times 2.5 / 100] \times 1/2$

●特定公益増進法人に対する寄附金(特別損金算入限度額)

$[資本金等の額 \times 当期の月数 / 12 \times 2.5 / 1,000 + 所得の金額 \times 5 / 100] \times 1/2$

(2) 個人の場合

所得の40%を上限として、寄附の合計金額から2千円を差し引いた金額が所得控除の対象となります。相続財産からの寄附についても、税制上の優遇措置があります。

3. 2009年度寄附金額実績

	件数	金額
一般寄附金	436件	24,298,575円
事業費への寄附	13件	13,008,575円
民間出えん金	1件	130,000円
賛助会	50件	9,500,000円
サポーターズクラブ	372件	1,660,000円
特定寄附金	54件	484,049,046円(注1)

(注1) うち、468,489,046円および2008年度より繰越した特定寄附金26,300,000円を、26事業(次頁「特定寄附金による支援事業」参照)に対する助成金として交付しました。残額(41,860,000円)は、7件の事業に対する助成金として2010年度に交付予定です。

(注2) なお、当基金設立以来2009年度末までの累計で、一般寄附金として24億3,997万円、特定寄附金として653億2,853万円を受け入れています。

2009年度の寄附者や寄附金による事業一覧

事業費への寄附者（敬称略）

「日本ハンガリー協力フォーラム」日本語教育促進事業に対する寄附	住友化学(株)
「四川大地震被災地の子供たち支援・交流プロジェクト」事業に対する寄附	三菱UFJ証券従業員組合
「第53回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展」事業に対する寄附	(株)資生堂／(学)女子美術大学／ (財)直島福武美術館財団／(株)ベネッセコーポレーション
「バルカン室内管弦楽団公演」事業に対する寄附	東京杉並ロータリークラブ会員 31名／企業1社
北京外交学院への図書寄贈事業に対する寄附	個人1名
事業全般への寄附	大垣市立江並中学校／個人3名

民間出えん金寄附者

個人1名

民間出えん金による支援事業（寄附者の意向に基づき特別事業を設定し、事業名に寄附者の名を付する「冠寄附」の例）

冠寄附事業名	寄附者および事業内容
内田奨学金フェローシップ	寄附者は内田元亨氏（故人）。米国・欧州等の若手音楽家等を日本に招へいし、日本の著名な音楽関係者等と交流し、共演、共同制作に従事する機会を提供。2009年度は米国から1名のフェローを招へい
高砂熱学工業・日本研究フェローシップ	寄附者は高砂熱学工業株式会社。東南アジアの日本研究振興のために、同地域の若手日本研究者に訪日研究の機会を提供。2009年度はベトナムから2名のフェローを招へい
開高健記念アジア作家招へい講演会	寄附者は開高初子氏、開高道子氏（作家開高健氏のご遺族、いずれも故人）。日本に紹介されることの少ないアジア文学の紹介と、文学関係者の交流促進のため、アジアから作家・文学関係者を日本に招へいし、各地で講演会や意見交換を行った。2009年度のウティット・ヘーナムーン氏（タイ）招へいをもって事業を終了
「渡辺健基金」図書寄贈	寄附者は渡辺行信氏（米国研修中に事故で逝去された元外務省職員渡辺健氏のご遺族）。中国天津社会科学院に日本研究のための図書を寄贈。2009年度は204冊の図書を寄贈

賛助会会員（2009年度末現在、50音順、敬称略）

[1] 特別会員

松竹(株)／電源開発(株)／(株)みずほ銀行／(株)三菱東京UFJ銀行

[2] 普通会員

(財)池坊華道会／出光興産(株)／(株)印象社／ウシオ電機(株)
 (財)裏千家今日庵／(財)NHKインターナショナル／
 カトーレック(株)／(株)関西アーバン銀行／(株)紀伊國屋書店
 共栄火災海上保険(株)／(株)講談社／講談社インターナショナル(株)
 (財)講道館／(社)国際交流サービス協会
 (株)国際サービス・エージェンシー／(学)駒澤大学
 (株)桜映画社／(株)資生堂／(株)ジャパンエコー社／
 (社)出版文化国際交流会／(財)少林寺拳法連盟
 スターレーン航空サービス(株)／(財)全日本剣道連盟
 第一生命保険相互会社／(株)第一成和事務所／ダイキン工業(株)
 大和証券キャピタル・マーケット(株)／(株)電通
 東京ビジネスサービス(株)／日興コーディアル証券(株)
 (社)日本映画製作者連盟／(株)日本折紙協会
 (財)日本国際協力センター／野村證券(株)
 野村證券(株)新宿支店／パナソニック(株)
 (株)美術出版サービスセンター／(株)日立製作所
 富士ゼロックス(株)／(株)凡人社／みずほ証券(株)
 (株)三井住友銀行／三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)
 (株)明治書院ホールディングス／森ビル(株)

特定寄附金による支援事業（）内は事業実施国

日米交流財団フェローシッププログラム(米国)
 ロータリー国際親善奨学支援事業2件(米国、日本)
 「故石川吉右衛門教授記念・比較日本法基金」の設立(米国)
 ウェスタンミシガン大学曾我道敏日本センター宛基金増資事業(米国)
 日米研究インスティテュート(米国)
 ミシガン大学ロー・スクール日本法研究プログラム(米国)
 コロンビア・ロー・スクール日米交流事業(米国)
 コロンビア・ロー・スクール日本法研究奨学金(米国)
 デューク・ロー・スクール日本法・文化プログラム(米国)
 ジャパン・リターン・プログラム2008年日本語サミット(日本)
 ジャパン・リターン・プログラム2009年日本語サミット・ニッポン新発見塾(日本)
 エルエスエイチアジア奨学金(日本)
 ドイツ社団法人日本語普及センター日本語教育事業(ドイツ)
 2009年日本・ハンガリー国交回復50周年記念事業(ハンガリー)
 2010年トルコにおける日本年(トルコ)
 日韓交流おまつり2009(日本)
 ミュージック・フロム・ジャパン創立35周年記念音楽祭(米国)
 四天王寺ワツ(日本)
 第16回ホノルルフェスティバル(米国)
 メコンフェスティバル2009(日本)
 日本音楽紹介ラジオ番組制作事業(中国)
 アジア女子大学2件(バングラデシュ)
 日中平和友好条約締結30周年記念「南京・平和友好桜花園」建設事業(中国)
 日英博覧会日本庭園修復事業(英国)

財務諸表

決算報告書、貸借対照表、損益計算書、損失の処理に関する書類

決算報告書 [平成21年4月1日～平成22年3月31日]

[単位：円]

区分		予算額	決算額
収入	運営費交付金	12,568,641,000	12,568,641,000
	運用収入	2,048,179,000	2,091,694,713
	寄附金収入	941,069,000	508,217,621
	受託収入	808,273,000	1,622,408,627
	その他収入	782,494,000	1,042,504,243
計		17,148,656,000	17,833,466,204

支出	業務経費	14,562,002,000	12,697,277,000
	文化芸術交流事業費	2,430,108,000	1,997,084,653
	海外日本語事業費	4,525,479,000	3,972,222,806
	海外日本研究・知的交流事業費	2,430,600,000	2,206,857,991
	調査研究・情報提供等事業費	504,793,000	443,028,381
	その他事業費	4,671,022,000	4,078,083,169
	一般管理費	2,586,654,000	2,504,994,611
	人件費	1,787,132,000	1,687,618,975
物件費	799,522,000	817,375,636	
計		17,148,656,000	15,202,271,611

(注) 決算報告書においては国際交流基金の国内勤務役職員人件費は一括して一般管理費に計上しているが、損益計算書においては、国内勤務役職員の勤務実態に合わせて各業務分野毎の費用として計上している。

貸借対照表 [平成22年3月31日]

[単位：円]

資産の部	I 流動資産	現金及び預金		6,781,595,396				
		有価証券		13,579,278,495				
		前払費用		46,379,419				
		未収収益		382,818,006				
		未収金		462,325,908				
		その他の流動資産		17,761,983				
		流動資産合計			21,270,159,207			
	II 固定資産	1 有形固定資産	建物	12,891,142,293				
			減価償却累計額	△ 3,215,635,857	9,675,506,436			
		構築物	313,245,294					
		減価償却累計額	△ 149,610,607	163,634,687				
		機械装置	9,134,105					
		減価償却累計額	△ 6,952,884	2,181,221				
		車両運搬具	122,867,430					
		減価償却累計額	△ 87,904,038	34,963,392				
		工具器具備品	1,118,820,508					
		減価償却累計額	△ 758,076,053	360,744,455				
		美術品		467,230,874				
		土地		195,318,000				
		建設仮勘定		4,725,000				
有形固定資産合計			10,904,304,065					
2 無形固定資産		借地権		10,598,000				
		ソフトウェア		61,421,440				
		電話加入権		441,000				
		ソフトウェア仮勘定		44,184,175				
		無形固定資産合計		116,644,615				
		3 投資その他の資産	投資有価証券		82,694,177,836			
長期預金				1,700,000,000				
敷金保証金				797,114,866				
投資その他の資産合計				85,191,292,702				
固定資産合計				96,212,241,382				
資産合計					117,482,400,589			
負債の部	I 流動負債	運営費交付金債務		2,360,483,364				
		預り寄附金		63,042,718				
		未払金		779,626,919				
		未払費用		1,579,736				
		前受金		1,462,514,167				
		預り金		8,761,086				
		リース債務		21,450,778				
		引当金						
		賞与引当金	14,113,556	14,113,556				
		流動負債合計			4,711,572,324			
	II 固定負債	資産見返負債						
		資産見返運営費交付金	909,469,369					
		資産見返寄附金	4,091,713					
		建設仮勘定見返運営費交付金	4,725,000					
		ソフトウェア仮勘定見返運営費交付金	21,171,675	939,457,757				
		長期リース債務		24,498,381				
		固定負債合計			963,956,138			
		負債合計					5,675,528,462	
		純資産の部	I 資本金	政府出資金		112,970,859,465		
				資本金合計			112,970,859,465	
			II 資本剰余金	資本剰余金	△ 555,499,434			
				損益外減価償却累計額(△)	△ 3,714,716,409			
				損益外減損損失累計額(△)	△ 126,000			
民間出えん金	900,502,787							
資本剰余金合計					△ 3,369,839,056			
III 繰越欠損金	当期末処理損失		△ 1,381,246,129					
	(うち当期総損失)		△ 341,408,890					
	繰越欠損金合計				△ 1,381,246,129			
IV 評価・換算差額等	その他有価証券評価差額金		3,584,325,317					
	繰延ヘッジ損益		2,772,530					
	評価・換算差額合計				3,587,097,847			
純資産合計					111,806,872,127			
負債純資産合計					117,482,400,589			

損益計算書 [平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日]

[単位：円]

経常費用	文化芸術交流事業費		2,320,425,383
	日本語教育事業費		4,111,902,047
	日本研究・知的交流事業費		2,434,660,711
	調査研究・情報提供等事業費		577,410,029
	その他事業費	在外事業費	3,576,181,297
		文化交流施設等協力事業費	475,910,895
			4,052,092,192
	一般管理費		1,387,727,464
	財務費用		1,215,281
	雑損		704,987,564
経常費用合計			15,590,420,671
経常収益	運営費交付金収益		10,885,082,980
	運用収益		2,066,913,543
	受託収入		646,031,171
	寄附金収益	寄附金収益	36,810,338
		特定寄附金収益	468,489,046
			505,299,384
	資産見返戻入	資産見返運営費交付金戻入	134,103,453
		資産見返寄附金戻入	1,335,361
			135,438,814
	財務収益	受取利息	1,962,794
		1,962,794	
雑益	日本語能力試験受験料等収益	763,460,094	
	その他の雑益	245,268,724	
		1,008,728,818	
経常収益合計			15,249,457,504
経常損失			340,963,167
臨時損失	固定資産除却損		3,327,194
	固定資産売却損		445,723
			3,772,917
臨時利益	資産見返運営費交付金戻入		3,327,194
			3,327,194
当期純損失			341,408,890
当期総損失			341,408,890

損失の処理に関する書類 [平成 22 年 8 月 24 日]

(単位：円)

I	当期未処理損失		1,381,246,129
	当期総損失		341,408,890
	前期繰越欠損金		1,039,837,239
II	次期繰越欠損金		1,381,246,129

諮問委員会等

以下の方々に委員として、ご協力いただいています。(50音順・敬称略)

国際交流基金 評価に関する有識者委員会

片山 正夫

財団法人セゾン文化財団 常務理事

古城 佳子

東京大学大学院総合文化研究科 教授

曾田 修司

跡見学園女子大学マネジメント学部 教授

高階 秀爾

財団法人大原美術館 館長

天日 隆彦

読売新聞社 論説委員

西原 鈴子

前・東京女子大学現代文化学部 教授

堀江 正弘

政策研究大学院大学 教授

森元 峯夫

株式会社エスイー 代表取締役社長

日本研究米国諮問委員会 (American Advisory Committee) 2009—2010

学者・研究者

フェローシップ小委員会 (RF 小委員会)

Research Fellowship
Screening Subcommittee

Wesley Jacobsen

ハーバード大学 言語学

Susan Long

ジョン・キャロル大学 人類学

Susan Napier

タフツ大学 文学/ポップカルチャー

Kikuko Yamashita

ブラウン大学 日本語学/言語学

Anne Walthall

カリフォルニア大学アーバイン校 歴史学

博士論文執筆者

フェローシップ小委員会 (DF 小委員会)

Doctoral Fellowship
Screening Subcommittee

Kent Calder

ジョンズ・ホプキンス大学 政治学

Rebecca Copeland

ワシントン大学 (セントルイス) 文学

James Dobbins

オーバーリン大学 宗教

Sabine Frühstück

カリフォルニア大学サンタバーバラ校 カルチュラルスタディー

Leonard Schoppa

バージニア大学 政治学

機関助成小委員会

(IPS 小委員会)

Institutional Project Support
Screening Subcommittee

Laura Hein

ノースウェスタン大学 歴史学

Edward Lincoln

ニューヨーク大学 経済学

Jennifer Robertson

ミシガン大学 人類学

Richard Samuels

マサチューセッツ工科大学 政治学

Veronica Taylor

ワシントン大学 法学

パリ日本文化会館運営審議会

フランス側委員

Louis Schweitzer

ルノー社名誉会長

Paul Andreu

建築家

Jean-Louis Beffa

サンゴバン社会長

André Larquie

パリ・ベルシー・総合スポーツセンター理事長
シャトレ劇場理事長、国際芸術都市理事長

Jean Maheu

会計検査院顧問

Jacques Rigaud

前フランス・メセナ協会会長

André Ross

元駐日フランス大使

Jean-Charles Rouher

元国際商工会議所事務総長

Christian Sautter

パリ市経済・財政・雇用担当助役、元経済財政工業大臣

Valérie Terranova

ジャック・シラク財団事務局長

日本側委員

福原 義春

株式会社資生堂名誉会長

伊東 順二

美術評論家、富山大学芸術文化学部教授

荻野 アンナ

作家、慶應義塾大学文学部教授

酒井 忠康

世田谷美術館館長

佐々木 元

日本電気株式会社特別顧問

佐渡 裕

指揮者

竹内 佐和子

京都大学工学研究科教授/日産科学振興財団
リーダーシッププログラムディレクター

西垣 通

東京大学大学院情報学環教授

芳賀 徹

岡崎市美術館館長、京都造形芸術大学名誉学長、
東京大学名誉教授

海外拠点一覧

2010年9月1日現在

韓国

ソウル日本文化センター

The Japan Foundation, Seoul
Vertigo Bldg. 2&3F, Yonseiro 10-1,
Seodaemun-gu, Seoul 120-833, Korea
TEL : 82-2-397-2820
FAX : 82-2-397-2830

中国

北京日本文化センター

The Japan Foundation, Beijing
#301, 3F SK Tower,
No.6 Jia Jianguomenwai Avenue,
Chaoyang District, Beijing, 100022, China
TEL : 86-10-8567-9511
FAX : 86-10-8567-9075

インドネシア

ジャカルタ日本文化センター

The Japan Foundation, Jakarta
Summitmas I, 2-3F, Jalan Jenderal Sudirman,
Kav. 61-62 Jakarta Selatan 12190, Indonesia
TEL : 62-21-520-1266
FAX : 62-21-525-1750

タイ

バンコク日本文化センター

(東南アジア総局を併設)
The Japan Foundation, Bangkok/
Southeast Asian Bureau
Serm-Mit Tower, 10F,
159 Sukhumvit 21 (Asoke Road),
Bangkok 10110, Thailand
TEL : 66-2-260-8560 ~ 64
FAX : 66-2-260-8565

フィリピン

マニラ日本文化センター

The Japan Foundation, Manila
12th Floor, Pacific Star Bldg.,
Sen. Gil. Puyat Ave. Ext., cor. Makati Ave.,
Makati, Metro Manila 1226, The Philippines
TEL : 63-2-811-6155 ~ 8
FAX : 63-2-811-6153

マレーシア

クアラルンプール日本文化センター

The Japan Foundation, Kuala Lumpur
18th Floor, Northpoint Block B,
Mid-Valley City, No.1, Medan Syed Putra,
59200, Kuala Lumpur, Malaysia
TEL : 60-3-2284-6228
FAX : 60-3-2287-5859

インド

ニューデリー日本文化センター

The Japan Foundation, New Delhi
5-A, Ring Road, Lajpat Nagar-IV,
New Delhi 110024, India
TEL : 91-11-2644-2967/68
FAX : 91-11-2644-2969

オーストラリア

シドニー日本文化センター

The Japan Foundation, Sydney
Shop 23, Level 1, Chifley Plaza,
2 Chifley Square,
Sydney NSW 2000, Australia
TEL : 61-2-8239-0055
FAX : 61-2-9222-2168

ベトナム

ベトナム日本文化交流センター

The Japan Foundation Center for
Cultural Exchange in Vietnam
No.27 Quang Trung Street,
Hoan Kiem District, Hanoi, Vietnam
TEL : 84-4-3944-7419/20
FAX : 84-4-3944-7418

カナダ

トロント日本文化センター

The Japan Foundation, Toronto
131 Bloor Street West, Suite 213,
Toronto, Ontario, M5S 1R1, Canada
Tel: 1-416-966-1600
Fax: 1-416-966-9773

米国

ニューヨーク日本文化センター

The Japan Foundation, New York
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-0299
FAX : 1-212-489-0409

ニューヨーク日米センター

The Japan Foundation
Center for Global Partnership NY
152 West 57th Street, 17F
New York, NY 10019, U.S.A.
TEL : 1-212-489-1255
FAX : 1-212-489-1344

ロサンゼルス日本文化センター

The Japan Foundation, Los Angeles
333 South Grand Avenue, Suite 2250,
Los Angeles, CA 90071, U.S.A.
TEL : 1-213-621-2267
FAX : 1-213-621-2590

メキシコ

メキシコ日本文化センター

The Japan Foundation, Mexico
Av. Ejército Nacional No. 418, 2do Piso,
Col. Chapultepec Morales, CP 11570,
Mexico, D.F., Mexico
TEL : 52-55-5254-8506
FAX : 52-55-5254-8521

ブラジル

サンパウロ日本文化センター

The Japan Foundation, São Paulo
Avenida Paulista 37, 2º andar Paraíso,
CEP 01311-902, São Paulo, SP, Brasil
TEL : 55-11-3141-0843/0110
FAX : 55-11-3266-3562

イタリア

ローマ日本文化会館

Istituto Giapponese di Cultura
(The Japan Cultural Institute in Rome)
Via Antonio Gramsci 74, 00197 Roma, Italy
TEL : 39-06-322-4754/94
FAX : 39-06-322-2165

ドイツ

ケルン日本文化会館

Japanisches Kulturinstitut
(The Japan Cultural Institute in Cologne)
Universitätsstraße 98, 50674 Köln, Germany
TEL : 49-221-9405580
FAX : 49-221-9405589

フランス

パリ日本文化会館

Maison de la culture du Japon à Paris
(The Japan Cultural Institute in Paris)
101 bis, quai Branly,
75740 Paris Cedex 15, France
TEL : 33-1-44-37-95-00
FAX : 33-1-44-37-95-15

英国

ロンドン日本文化センター

The Japan Foundation, London
Russell Square House 6F, 10-12 Russell Square,
London, WC1B 5EH, United Kingdom
TEL : 44-20-7436-6695
FAX : 44-20-7323-4888

スペイン

マドリッド日本文化センター

The Japan Foundation, Madrid
Calle Almagro 5, 4a planta, 28010 Madrid, Spain
TEL : 34-91-310-1538
FAX : 34-91-308-7314

ハンガリー

ブダペスト日本文化センター

The Japan Foundation, Budapest
Oktogon Ház 2F, Aradi u.8-10,
1062 Budapest, Hungary
TEL : 36-1-214-0775/6
FAX : 36-1-214-0778

ロシア

全ロシア国立外国文献図書館「国際交流基金」

文化事業部 (モスクワ日本文化センター)
The Japanese Culture Department
"Japan Foundation" of the All-Russia State
Library for Foreign Literature
4th Floor, Nikoloyamskaya Street, 1, Moscow,
109189, Russian Federation
TEL : 7-495-626-5583/85
FAX : 7-495-626-5568

エジプト

カイロ日本文化センター

The Japan Foundation, Cairo
5th Floor, Cairo Center Building,
106 Kasr Al-Aini Street,
Garden City, Cairo, Arab Republic of Egypt
TEL : 20-2-2794-9431/9719
FAX : 20-2-2794-9085

国内連絡先一覧

国際交流基金

ジャパンファウンデーション

本部

http://www.jpf.go.jp/

〒160-0004

東京都新宿区四谷4-4-1

■情報センター (JFIC)

TEL. 03-5369-6075

FAX. 03-5369-6044

■JFICライブラリー

TEL. 03-5369-6086

FAX. 03-5369-6048

日本語国際センター

http://www.jpf.go.jp/j/urawa/

〒330-0074

埼玉県さいたま市

浦和区北浦和5-6-36

■代表

TEL. 048-834-1180

FAX. 048-834-1170

■図書館

TEL. 048-834-1185

FAX. 048-830-1588

関西国際センター

http://www.jpf.go.jp/j/kansai/

〒598-0093

大阪府泉南郡田尻町

りんくうポート北3-14

■代表

TEL. 072-490-2600

FAX. 072-490-2800

京都支部

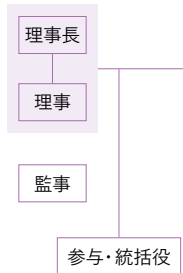
〒606-8436

京都市左京区粟田口鳥居町2番地の1

京都市国際交流会館3階

TEL. 075-762-1136

FAX. 075-762-1137



組織

2010年10月1日現在

本部	総務部	総務課 人事課 企画・評価課 事業開発戦略室	システム管理室 情報公開室 調査室 給与・人事評価室
	経理部	財務課 会計課	財務監理室
	海外事業戦略部	海外拠点課 海外事業課	パリ日本文化会館業務室
文化事業グループ			
文化事業部	企画調整チーム 生活文化チーム 造形美術チーム 舞台芸術チーム 映像・文芸チーム トリエンナーレチーム ポップカルチャーチーム		
日中交流センター			
日本語事業グループ			
日本語教育支援部	企画調整チーム JF講座チーム さくらネットワークチーム 教師研修チーム (日本語国際センター)		
日本語事業運営部	事業化開発チーム (日本語国際センター) 教育事業チーム (関西国際センター) 試験運営チーム (日本語試験センター) 試験制作チーム (日本語試験センター)		
日本研究・知的交流事業グループ			
日本研究・知的交流部	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム		
日米センター			
情報センター (JFIC)			
監査室			
附属機関	日本語国際センター 関西国際センター		
支部	京都支部		
海外拠点	<ul style="list-style-type: none"> ■ローマ日本文化会館 ■ケルン日本文化会館 ■パリ日本文化会館 ■ソウル日本文化センター ■北京日本文化センター ■ジャカルタ日本文化センター ■バンコク日本文化センター ■マニラ日本文化センター ■クアラルンプール日本文化センター ■ニューデリー日本文化センター ■シドニー日本文化センター ■トロント日本文化センター ■ニューヨーク日本文化センター 	<ul style="list-style-type: none"> ■ロサンゼルス日本文化センター ■メキシコ日本文化センター ■サンパウロ日本文化センター ■ロンドン日本文化センター ■マドリッド日本文化センター ■ブダペスト日本文化センター ■全ロシア国立外国文献図書館「国際交流基金」文化事業部 (モスクワ日本文化センター) ■カイロ日本文化センター ■東南アジア総局 ■ベトナム日本文化交流センター 	



JAPAN FOUNDATION 国際交流基金

国際交流基金 2009年度 年報

2010年11月発行

編著・発行 国際交流基金 情報センター
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1
TEL.03-5369-6075
FAX.03-5369-6044

編集 ita&co [長谷川直子・真壁佳織]

デザイン 岡本健+ [岡本健・阿部太一]・石島章輝

表紙写真撮影 増田智泰

印刷 株式会社ブライズコミュニケーション

space design JFIC Library [表紙]

インテリアデザイン：株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ一級建築士事務所

照明：ぼんぼり光環境計画 株式会社

ファブリック：株式会社 布

サイン：有限会社アキタ・デザイン・カン



<http://www.jpff.go.jp/>